

2010年度 事業報告書
【自2010年4月1日～至2011年3月31日】

研究所名	人文科学研究所
研究所長名	小関 素明

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施		
科学研究費補助金	3件 (3,760,000円)	基盤研究(B) 1件・基盤研究(C) 2件
学内助成	8件 (11,546,000円)	基盤研究 1件、国際的発信強化 2件、 110周年企画 2件・ 研究推進施策（産業社会学部） 1件、 研究推進施策（文学部） 2件
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	4件	「グローバル化とアジアの観光」 国際セミナーを開催し、マレーシアトレンガヌ大学、マレーシア科学大学、フィリピン大学、ウダヤナ大学（インドネシア）・マヒドール大学（タイ）・ラオス国立大学・ベトナムハノイ大学・台湾師範大学との研究者（各1名）、および上海師範大学旅游学院（6名）との交流を行った。（計14名） 「間文化現象学」研究プロジェクト ・OPO III への参加 Workshop:Transkulturelles Philosophieren aus ostasiatischer Sicht への参加
研究会実施状況	54件	「グローバル化とアジアの観光」研究会 : 3件 「暴力からの人間存在の回復」研究会 : 3件 「間文化現象学」研究会 : 42件 「近代日本思想史」研究会 : 3件 「グローバル化と公共性」研究会 : 3件
3. 成果発信		
学術図書出版	2件	・江口信清・藤巻正己〔編著〕『観光研究レファレンス・データベース〔日本編〕』ナカニシヤ出版、2011年3月他
学術論文	36件	査読無論文13件 査読付論文7件、外国語論文16件)
学会発表	7件	海外学会発表3件、国内学会発表4件
シンポジウム等	6件	「グローバル化とアジアの観光」研究プロジェクト2件 「間文化現象学」研究プロジェクト4件

招待講演	1件	上海師範大学「中日人文地理与観光研究所」開所記念セミナー
紀要発行	2件	・立命館大学人文科学研究所紀要(和文)96号 ・Journal of Ritsumeikan Social Sciences and Humanities vol.3(英文)
学会誌	1件	「人文地理」(人文地理学会)62巻6号、英文特集号”Tourism in Asia: Trends and Challenges”、(所収論文6編)
4. 人材育成		
PD・RAの雇用	3名	
院生の参加	4名	「グローバル化とアジアの観光」研究プロジェクト:2名 (文学研究科後期課程1名、国際関係学研究科後期課程1名) 「近代日本思想史」研究プロジェクト:2名
5. 社会貢献活動		
公開講座の実施	7件	・立命館土曜講座 「北欧の国々から学ぶ」(2010年11月全4回:参加のべ479名) 「「グローバル化と人の移動—ツーリストそして労働者—」 (2010年12月全2回:参加のべ140名) ・「大阪国際大学教養講座」 (2011年1月1回:参加のべ15名)
審議会等委員	1件	「グローバル化とアジアの観光」研究プロジェクト 科研費審査委員

2. 今年度の活動経過

* 具体的な内容を記述してください。

実施項目①:「グローバル化とアジアの観光」研究プロジェクト

1. 定例研究会

(1) 第1回(2010年4月24日)

2010年度活動計画に関する討議、研究報告(古村 学「観光からみる離島社会—隠岐諸島西ノ島と小笠原諸島父島の事例から—」)

(2) 第2回(2010年6月19日)

研究報告(①雨森直也「台湾・台東縣の少数民族観光の予備的調査報告」、②山本勇次「マレーシア(ペナン島)のネパール人労働者の予備的調査報告」)

(3) 第3回(2010年10月9日)

研究報告(①石井香世子「観光と女性の越境移住—北タイ少数民族地域に見る観光産業と女性の越境移住—」)

2. 国際セミナー

(1) 国際ツーリズムセミナー”Progress of Tourism Studies in Asia”の開催

5月8日・衣笠キャンパスにおいて、韓国・マレーシアからの研究者2名、国内からゲスト1名、研究プロジェクトメンバー2名、計6名による発表

(2) 国際ツーリズムセミナー”Progress of and Challenges in Tourism Studies; A Comparative Study on Asian Countries”を開催。

11月6日、キャンパスプラザを会場にタイ・マレーシア・インドネシア・フィリピン・ベトナム・ラオス・台湾および国内の研究者8名による研究報告をふまえて討議を行った。11月7日には、UNESCO世界遺産を有す国際観光地・奈良において、海外からのゲストスピーカーとともにエクスカージョンと現地討議を行った。

3. 研究員の研究活動

①雨森直也「中国・雲南省ペー族社会におけるツーリズムに関するインタビュー調査」

②山本勇次「マレーシア・ペナンにおけるネパール人労働者に関するインタビュー調査」

その他特記事項

2010年10月29日に「立命館創始140年・学園創立110周年 ペナン・セミナー「—マラッカ海峡歴史遺産都市の過去・現在・未来—」(“The Past, Today and Future of Penang as a Crossroad and Historical Heritage Town”)を開催した(UNESCO世界遺産に登録されたペナンよりNGO代表者2名を招聘)。同セミナーの予算は「2010年度研究推進施策(文学部)」⑤「ツーリズム・トランスナショナルな人の移動研究プラットフォーム」を活用したが、企画と運営は、「グローバル化とアジア」研究会が執り行った。

人文研英文ジャーナル Journal of Ritsumeikan Social Sciences and Humanities, Vol.3 で特集号(Progress of and Challenges in Tourism Studies; A Comparative Study on Asian Countries)を組み、11月6日開催の国際ツーリズムセミナーの成果(8編の論考所収)を発信した。

日本の人文地理学界を代表する人文地理学会の機関誌『人文地理』第62巻6号(英文特集号)において、5月8日開催の国際ツーリズムセミナーの成果(6編の論考所収)を発信した。

実施項目②:「間文化現象学」研究プロジェクト

1. 研究会の開催

学内メンバーによる「間文化現象学研究会」を年間42回開催した。

2. 講演会の開催

(1)2010年5月14, 15日に、ミハエル・シュタウディグル氏を招いて「間文化現象学ワークショップ」と「間文化現象学講演会」を開催した。

(2)2010年6月28日に、「暴力からの人間性の回復」研究会との共催により、ロディー・リード、リサ・ブルーム両氏を招いて「間文化現象学講演会」を開催した。

(3)学内の研究高度化の支援を受けて、2011年2月25日に「『哲学への権利』映画上映会・討論会」を開催した。

(4)2011年3月5, 6日に「人文学と間文化性」をテーマとする国際シンポジウムを開催した。

3. 研究員の研究活動

メンバー: 亀井は、アメリカで資料収集を行った(2010年9月)。

メンバー: 佐藤は、フランスで資料収集を行った(2010年8月)。

大学院生: 池田は、ロシア連邦、国立サンクトペテルブルク大学で2010年6月に開催された国際会議に参加、研究発表を行った。

センター長: 谷は、台湾・高雄で開かれた OPO III および Workshop: Transkulturelles Philosophieren aus ostasiatischer Sicht に参加し、海外の研究者とのネットワーク形成を行った。

その他特記事項

2010年度は3月の東日本大震災によって、海外の研究者の来日、東北地方の研究者の上洛に困難が生じたため、2011年3月24日に予定されていた「間文化現象学シンポジウム」の企画を、2011年度に繰り越さざるをえなくなった。

実施項目③:「近代日本思想史」研究プロジェクト

1. 今年度の活動経過

(研究の目的と計画)本研究プロジェクトは、日本学術振興会の科学研究補助金の交付を受けて、1950年代とりわけ1952年4月末の講和独立から1956年12月の鳩山内閣退陣までの4年8ヶ月の期間における、日本内外の憲法論議を探求することを目的としている。中でも主に地方紙の論説記事を中心に、全国的規模で調査収集し、検討することとしている。調査収集に当たっては、先行研究や全国紙の動向を参考としつつ、ジャーナリズム上で憲法問題が争点として浮上したポイントの時期に着目して進めることとした。

2. 資料収集の進展

本年度は、全国紙4紙を始め、『中国新聞』といったブロック紙、『東奥日報』など東北地方、『神奈川新聞』など関東地方、『徳島新聞』など中国四国地方、『南日本新聞』など九州地方の、各地方紙の論説を中心に基礎的資料の収集に努めることとした。この点では当初計画どおり、横浜の新聞ライブラリー所蔵の新聞と、国立国会図書館(東京館・関西館)所蔵の新聞を基本として資料収集を進めた。なお一部に、各県にしか所蔵されていない新聞の、当該県立図書館での資料収集も行っている。その結果、ブロック紙の調査収集はほぼ完了し、地方既存紙ではほぼ全国の全ての地域の新聞の資料収集を進めることができた。すでに対象とする全期間の収集を終えた新聞も全国紙、ブロック紙、地方紙の既存紙で45紙を数え、新興紙・復興紙でも『室蘭民報』など17紙の論説を収集するに及ん

だ。さらに戦前の憲法論議との比較で、やはりジャーナリズム上の天皇機関説事件関係資料の発掘と収集を進めることができた。

3. 研究成果の公表

本年度は3回の研究会で6名の報告を行った。憲法史関係の研究はもとより、広く近現代史研究の成果を挙げることが出来た。特にプロジェクトの目的と結びつけての本年度の研究成果としては、分担研究者の梶居佳宏が「50年代改憲論と新聞論説(1952-1957年)―中間報告―」を『立命館大学人文科学研究所紀要』96号に発表し、同じく分担研究者の福井純子が9月の集中研究会において「尾崎士郎の『天皇機関説』をめぐって」を口頭発表したことが挙げられる。

実施項目④:「暴力からの人間存在の回復」研究プロジェクト

1. 研究会の開催

- (1) テーマ: Public Bullying and Democratic Culture, or Abject Subjecthood in US Daily Life”
報告者: ロディ・リード Roddey Reid(カリフォルニア大学)
テーマ: “Climate Change in the Polar Region and its Visualization”
報告者: リサ・ブルーム Lisa E. Bloom(カリフォルニア大学)
- (2) テーマ: 「内から見たメビウス症―顔の表情のない生活」
Inside Möbius; living without facial expression.
報告者: ジョナサン・コール(イギリス プール病院臨床神経生理学科医長)
- (3) テーマ: 『哲学的なもの政治的なもの―開かれた現象学のために』を読む／語る
報告者: 松葉祥一(神戸市看護大学教授)
質問者: 加藤恵介(神戸山手大学助教授)・亀井大輔(立命館大学文学部助教)・黒岡佳柁(立命館大学文学研究科博士後期課程)

実施項目⑤:「グローバル化と公共性」研究プロジェクト

1. 研究会の開催

- (1) 第1回(開催日時: 2010年7月22日(木) 16:30-18:00、学而館第3研究会室)
共催: 国際地域研究所「発展途上国研究会」研究会
テーマ: 分権化と市民社会を解読する(1): チリとインドのケースから
報告者(所属) 中根 智子(共通教育推進機構講師)
小林 操史(国際関係研究科研究生)
- (2) 第2回(開催日時: 2010年9月7日(火) 17:00-18:30、学而館第3研究会室)
テーマ: コスモポリタン民主政へむけて
報告者: ダニエル・アーチブージ(イタリア国家研究評議会・ロンドン大学バークベック校教授)
- (3) 第3回(開催日時: 2010年11月23日(火) 15:00-17:00、修学館3階 産社共研)
共催: 産業社会学部「東アジアの市民社会のネットワーク」研究会
テーマ: ①「市民社会の論じられ方―中国とスウェーデンを例として―」
②「東アジア諸国におけるジェンダーの問題―女性就業・少子化・ワークライフバランス」
報告者(所属): ①篠田 武司(産業社会学部教授) ②筒井 淳也(産業社会学部准教授)

その他特記事項

2010年度は3月の東日本大震災によって、海外の研究者の来日に困難が生じたため、2011年3月26・27日に予定されていた国際シンポジウム「「転換期の東アジア: East Asia in Transition」」の企

画を、2011年度に繰り越さざるをえなくなった。

実施項目⑥: 研究所紀要発行

計画の実施状況

研究所の研究プロジェクトの研究成果及び学内教員の人文社会科学分野の研究成果を紀要としてまとめ、学内外に発信した。『立命館大学人文科学研究所紀要 96号』2011.3 発行(和文)、“Journal of Ritsumeikan Social Sciences and Humanities vol.3” 2011.3 (英文) をそれぞれ発行した。

実施項目⑦: 研究所図書集書

計画の実施状況

本年度も図書予算を計上し、研究所の集書方針に基づき図書・雑誌等の収集を行った。今後も継続的な図書集書を行っていく予定である。

実施項目⑧: 公開講演会(生涯学習講座)

立命館土曜講座

11月全4回

特集テーマ: 北欧の国々から学ぶ

1. スウェーデンから学ぶ福祉と経済の両立 産業社会学部 教授 篠田 武司
2. スウェーデンの環境政策について 駐日スウェーデン大使 ステファン・ノレーン
3. フィンランドの教育から学べること 大阪教育大学教育学部 教授 二文字 理明
4. ノルウェーにみる男女均等政策について 立命館大学産業社会学部 特別任用教授 中川 順子

12月全2回

特集テーマ: グローバル化と人の移動—ツーリストそして労働者—

1. 東南アジアのツーリズムの風景 文学部教授 藤巻 正己
日本人バックパッカーの身ぶり 文学部非常勤講師 大野 哲也
2. トランスナショナル化するマレーシアの外国人労働者 文学部教授 藤巻 正己
ペナンにおけるネパール人労働者の生存戦略 大阪国際大学現代社会学部 山本 勇次

本年度の予算執行合計 8,617,367 円

本年度当初予算合計 10,869,000 円 (執行率 79.2%)

※2010年度は別途、「立命館創始140年・学園創立110周年・APU開学10周年記念企画の採択を受け 780,000 円の予算措置を受けた。

東日本大震災の影響により3月に開催予定としていた国際シンポジウムが延期となったため、その経費を2011年度に繰り越した。

2010 年度 事業報告書
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	国際地域研究所
研究所長名	松野周治

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	<small>上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額</small>	
科学研究費補助金	6 件 (12,896,000 円)	基盤 B×2 件、基盤 C×3 件、若手×B1 件 * 直接 11,240,000、環境整備 1,656,000
その他外部資金	(件 円)	
学内助成	3 件 (1,700,000 円)	基盤研究×1 件、成果発信×1 件、図書出版×1 件
	1 件 (2,000,000 円)	立命館創始 140 周年・学園創立 110 周年記念
研究支援業務	2,805,000 円	執行額 2,566,904 (震災の影響で会議中止となったため、200,000 円次年度繰越)
講演会シンポジウム	400,000 円	執行額 212,234 (200,000 円次年度繰越) (震災の影響で会議中止となったため、200,000 円次年度繰越)
図書業務	4,485,000 円	執行額 4,462,146
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	2 件	上海社会科学院部門経済研究所と研究交流協定締結、英国学派の拠点大学である英国アバリウストウィス大学と国際的ネットワークの維持発展に努め、国地研英文紀要へ寄稿 2 件。
研究会実施状況	25 件	メコン川開発研究会 5、ヒューマン・トラフィッキング研究会 3、途上国研究会 3、北朝鮮問題研究会 1、英国学派とポスト西洋型国際関係理論研究会 3、日米中政治経済研究会 9、EU 研究会 1
3. 成果発信		
学術図書出版	6 件	メコン 3 件、英国学派 2 件、北朝鮮 1 件
学術論文	17 件	メコン 査読付 3・外国語 1、IT 中国 外国語 1、EU 論文 1、日米中 論文 1、英国学派 論文 2・外国語 6、北朝鮮 論文 2

学会発表	7 件	メコン 海外 1・国内 2、IT 中国 海外 1、英国学派 海外 2・国内 1、
シンポジウム等	3 件	日中国際シンポジウム「大連地域における産業集積の変化」 立命館創始 140 周年・学園創立 110 周年記念国際シンポジウム「グローバル危機後の新たな東アジア構築」（参加 144 名） 立命館大学・厦門大学共同セミナー（メコン）
講演会	5 件	メコン 1、EU 研究会 4
紀要発行	3 件	『立命館国際地域研究』第 32 号、第 33 号、 <i>Ritsumeikan International Affairs</i> vol. 9
ニューズレター発行	2 件	Vol. 40、 vol. 41
4. 人材育成		
PD・RA の雇用	1 名	英国学派 PD1 名（衣笠総合機構所属）
PD・RA の就職（常勤）	1 件	就職先：大阪大学大学院国際公共政策学科助教
院生の PJ 参加	12 名	日米中 3 名、ヒューマン・トラフィッキング 研究 1 名、英国学派 1 名、 北朝鮮 7 名
5. 社会貢献活動		
公開講座の実施	1 件	土曜講座特別公開講座 1 回（EU 研究会）
一般刊行物発行	1 件	英国学派 1
初等・中等教育との連携	件	
学協会の運営、事務局業務		
審議会等委員		
6. その他	3 件	北朝鮮 3 件（ラジオカフェ 2 回、KBS 1 回）

2. 今年度の活動経過

* 具体的な内容を記述してください。

実施項目①：メコン川開発研究会「ASEAN・Divideの克服とメコン川地域開発」(科研基盤B) 計画の実施状況

- 2010年8月22日-8月30日の期間に、ベトナムへ2つの調査団(ハノイ班4名とホーチミン班4名の計8名)を送り現地調査を行った。
 - ハノイ班は、①ベトナムのGMS政策、②ベトナムと他のGMS諸国との経済関係、③外国資本とベトナムの経済開発、④ベトナムの環境保全、等を中心に調査を行った。具体的には、ベトナム国家大学ハノイ校、ベトナム貿易大学およびベトナム国立社会人文科学センターでワークショップを行い、またベトナム計画投資省と同国家銀行[中央銀行]でヒヤリング調査を行った。加えて、ベトナムに進出している日系企業(ブラザー工業、阪和興業等)でヒヤリング調査を行った。さらに、GMSの「南北経済回廊」の現状について、ハノイーランソン間と中越間の国境貿易についても現地調査を行った。
 - ホーチミン班もまた上記の調査課題を中心に現地調査を行った。フエ農業大学やベトナム国家大学ホーチミン校でセミナーを開催し、ダナンでGMSの「東西経済回廊」の利用状況を、ホーチミンで「南部経済回廊」の今後の発展方向についてそれぞれ現地調査を行った。加えて、カントーでメコン川の環境保全の現状について現地調査を行った。
- 2011年3月6日-9日の期間に、中国の東南アジア研究とGMS研究を代表する研究機関である福建省の廈門大学南洋研究院で、「GMS開発をめぐる日本と中国の関係」をメインテーマにして共同セミナーを開催した。同セミナーでは日中双方から、①基調報告としてGMSに対する中国と日本のアプローチについて詳しい検討報告があり、次いで、②GMS諸国の内のカンボジア、ミャンマーおよびベトナムの経済分析が行われ、それを踏まえてGMS開発に対する日中の協力について有意義な討論が行われた。

予算の執行状況

<科研B> 直接経費 4,900,000 環境整備 680,388 計 5,580,388 円

実施項目②：ヒューマン・トラフィキング研究会「東アジアにおける人身取引と法制度・運用実態の総合的研究」(基盤科研B)

計画の実施状況

(i) 目標

「本研究は、日本における人身取引の実態を東アジア全体の動向の中に位置づけて、これに対する法規制の現状と課題を被害者実態に即した保護・救済・権利保障という視点から探り、国際的な調査・研究ネットワークの構築を旨とする」とした。基本的には、この方向での調査研究が進められたと評価できる。

(ii) 具体的な研究計画

2010年度の具体的な研究項目は、以下のとおり。

「第1に、人身取引をめぐる日本の出入国管理と刑事司法についての法実証的な調査・分析を行い、性的搾取目的の人身取引事案の確定記録及び関連資料の入手を試み、その閲覧と分析・検討を行う。ここには、国際結婚・養子縁組・虚偽認知の形態をとった人身取引の事例分析を含む。第2に、労働搾取目的の人身取引の実態分析—研修生・技能実習生などの被用者・雇用者の実態調査と労働政策・法制上の問題点の析出をする。第3に、性的搾取・労働搾取の人身取引の被害者に対する聞き取りと意識調査(被用者・雇用者・国民)—各関係NGOとの協力を得て実施、第4に、人身取引の多面的な構造に対する学際的、方法的な検討を行う(憲法・刑事法・国際人権法・入管行政法および国際政治・経済、社会・労働・福祉政策、行政実務などの分野にわたる)、第5に、日本と東アジア諸国における人身取引の実態と法制・政策を行う—とくにタイ・フィリピンの実態調査

—を優先し、中国・韓国・台湾・東南アジア、米国などについては、海外の大学・研究所の協力をえて、行う。これを通じて、国際的な調査・研究ネットワークの構築を目指す。

(iii) 実施状況と総括、

第1の「人身取引をめぐる日本の出入国管理と刑事司法についての法実証的な調査・分析」に関して、法務省・入管当局とJITCO（国際研修協力機構）へのヒヤリングを行い、また、関係弁護士との連絡づくりが実現できた。大きな成果で、第1の課題の手がかりをつかんだと思うが、実証的な分析は手についておらず、事件・実務にかかわる弁護士との連絡がつきそうだと言う程度で、見通しは明るくない。

このテーマは、本研究の支柱の一つであり、当初から、最も困難な課題と予想した。2011 年度、ぜひとも出入国管理の法実証的分析に具体的に手をつけること、このための実行チームの編成が必要であると思われる。とくに、立命館大学関係のメンバー（樋爪・徳川氏をはじめとする）による出入国管理法制の研究と、実務法曹による実例分析に大いに期待される。

なお、これに関連して、人身取引をめぐるタイ・フィリピンの出入国管理法制から、日本の現状を批判的に検討するアプローチも重要で、この点で、タイ・フィリピン研究班からの情報提供、問題提起が重要である。

第2の「労働研修生・技能実習生」問題は、JITCO（国際研修協力機構）への訪問と関係する実務法曹との連絡づくりが進展した。吉田美喜夫氏と実務法曹による調査・研究を期待している。

第3の「性的搾取・労働搾取の人身取引」調査は、主としてタイ・フィリピン研究班によって進められたが、第2の「労働研修生・技能実習生」問題を含めた具体的な調査・検討の進展を期待する。秋の国際会議で、この分析報告が実現することを期待する(中国)。なお、日本について、性的搾取の人身取引事例が表面上、著しく低下しているが、その実態はどうか、どのように把握するかを全体で検討し、この点での報告が国際会議で可能になるようにしたい。

第4の「人身取引の学際的、方法的な検討」は主として、文献・資料・学術雑誌を通じた研究になると思います。私の知る限りで、大野聖良さんが優れた理論研究（「移動の視角からみた日本の人身取引の意味—人身取引問題の新局面として」ジェンダー研究 13 号 47 頁以下・東海ジェンダー研究所）を公表し、また、本研究会メンバーがさまざまな形で調査・研究の成果をまとめられていると思う。本研究の実質メンバーである Louise Shelley が世界の実情をまとめた「Human Trafficking」を、また、大久保史郎との共編で「Human Security, Transnational Crime and Human Trafficking」を公刊した。2011 年度秋の国際会議が東アジアにおける人身取引の実態と対策が浮き彫りになるようにしたいので、そのための報告メンバーを招聘し、ここでの報告が実証的、理論的な調査研究の現段階を体現する結果となるようにしたい。

第5の「タイ・フィリピンの実態調査」は、昨年 8 月に、共に実施され、まとまった成果が生まれている。この調査を、国際的な調査・研究ネットワークづくりと併せて、今年度の国際会議に結びつけたい。

予算の執行状況

< 科研 B > 直接経費 3,800,000 環境整備費 394,675 計 4,194,675 円

実施項目③: 日米中政治経済研究会「日米中経済関係の分析と日米同盟の変容」

計画の実施状況

研究会を合計 9 回開催した。それぞれの概要は研究会実施一覧を参照。

予算の執行状況

国内交通費 40,660 円、教研報酬支出 44,444 円 計 85,104 円

実施項目④: EU研究会「欧州統合とマルチレベル・ガバナンスの学際的研究」(科研基盤 C)

計画の実施状況

研究会を計1回、講演会を計4回、公開講座を計1回開催した。それぞれの概要は研究会実施一覧を参照。

予算の執行状況

兼職本俸 10,800 円、教研委託費 5,250 円、一般消耗品 1,143 円、会議渉外費 3,401 円、国内交通費 11,610 円、兼教兼務その他 30,000 円 計 62,204 円

<科研費 C>直接経費 500,000 環境整備費 75,000 計 575,000

実施項目⑤: 英国学派とポスト西洋型国際関係理論研究会「英国学派とポスト西洋型国際関係理論に関する批判的検討」

計画の実施状況

2010 年度は、下記項目に重点を置き、プロジェクトを推進してきた。

- ①2010 年 3 月シンポジウムをまとめた英文紀要における特集の刊行
2010 年 3 月に実施したシンポジウム『岐路に立つ国際関係理論－西洋／非西洋的視点からの新構想 (“International Theory at the Crossroads: Critical Scrutiny from the West/Non-western Views”)』の成果として、*Ritsumeikan International Affairs*, vol.9 (2011 年 2 月)において特集を組み、Special Issue: International Theory at the Crossroads: Critical Scrutiny from Western/Non-western Views として刊行した。
- ②前プロジェクト(英国学派と国際関係理論)の成果を引き継いだ翻訳出版
英国学派の古典である論文集 *Diplomatic Investigations* (Herbert Butterfield and Martin Wight eds., London: Allen and Unwin, 1966) の翻訳を完了し、『国際関係理論の探究－英国学派のパラダイム』(バターフィールド&ワイト編著、佐藤誠、安藤次男、龍澤邦彦、大中真、佐藤千鶴子、齋藤洋翻訳)として、日本経済評論社から 2010 年 11 月に刊行した。
- ③上記に関連した日本語書籍の刊行
2010 年度は、日本語での専門書の刊行準備を三回にわたる研究会の際に実施し、問題関心並びに執筆テーマに関する意見交換を実施した。
- ④英国学派ならびにポスト西洋型国際関係理論に関するデータベースの構築と拡充
標記に関する書籍のデータベースは現在作業中である。
- ⑤上記計画に加え、2010 年度は実績のとおり、三回にわたる研究会を実施した。
(研究会実施一覧参照)

予算の執行状況

なし

実施項目⑥: 途上国研究会「グローバル・サウスにおけるポスト・ネオリベラリズムに向けた下からのネットワーク型ガバナンス構築」(科研基盤 C)

計画の実施状況

研究会を計3回開催した。それぞれの概要は研究会実施一覧を参照。

予算の執行状況

なし(プロジェクトとしての執行はとくになし)

<科研費 C>直接経費 900,000、環境整備費 135,000 計 1,035,000

**実施項目⑦: 北朝鮮問題研究会「日米韓の対北朝鮮政策を通じた北東アジアの平和と安定」
(基盤 C、成果発信、図書出版)**

計画の実施状況

研究会計 1 回、シンポジウム・公開講座等で報告した他、翻訳出版を行った。研究会は研究会実施一覧を参照。

<国際シンポジウム企画または招請参加>

- ・2010 年 5 月「韓国政府の対北朝鮮政策」韓国国家安全保障戦略研究所所長講演会
- ・2010 年 5 月「東北アジアの安全保障と信頼醸成」東国大学北韓研究所
- ・2010 年 10 月「北朝鮮の後継者構築と李明博政権後半の対北・統一政策展望」東国大学
- ・2010 年 12 月「激動する北東アジア情勢」韓国統一研究院シンポジウム

<翻訳プロジェクト>

申栄錫『韓国歴代政権の統一政策変遷史』明石書店 2011 年翻訳出版

予算の執行状況

<成果発信> 教研報酬 88,888、消耗品費 99,004 計 187,892

<図書出版> 教研印刷費 1,000,000 計 1,000,000

<科研費 C> 直接経費 計 640,000 環境整備費 91,919 計 731,919 合計 1,919,811 円

実施項目⑧: 立命館現代中国研究会「現代中国の社会・文化的変容の研究―「近代化」の諸相―」

* 報告書未提出

実施項目⑨: 華人経営研究会「東アジア3カ国・地域の経済環境における華人企業の戦略構築に関する比較研究」(科研若手 B) * 報告書未提出

<科研若手 B> 直接経費 500,000 環境整備費 75,000 計 575,000 円

実施項目⑩: 中国 IT 企業家の諸類型とビジネスモデルの社会的形成条件(学内基盤)

予算の執行状況

一般消耗品費 41,082、印刷費 3,420、国内研究旅費 95,260、国内郵送料 1,180

図書資料費 231,466、教研負担金 21,000、教研報酬 30,000 合計 499,965 円

実施項目⑪: グローバリゼーションの進展と Smart Power を軸とするアジア・太平洋の機能主義的地域協力 * 報告書未提出

実施項目⑫: 日中国際シンポジウム「大連地域における産業集積の変化」実施

1. 日中国際シンポジウムの実施

2010 度の日中学術交流、および大連との国際的地域連携活動として、立命館大学国際地域研究所、同東北アジア地域研究センター、大連市人民政府発展研究センターは 2010 年 6 月 25 日、本学の末川会館において日中国際シンポジウム「大連地域における産業集積の変化」を開催した。本学術交流に、大連市人民政府発展研究センターから研究者 4 名と幹部 1 名が派遣された。

2. 大連との学術文化交流の実績と今後

2004 年 11 月、大連市と立命館との間で「学術交流に関する覚書」が締結されるとともに、当時の夏徳仁大連市長(現在、大連市党書記)が立命館大学で「東北アジア経済協力における大連の歴史的好機」と題する特別講演を行った。大連市との覚書の締結は立命館大学が国境を越えた、日中「産学公」連携を実現したといえる。

この覚書を踏まえて、2006 年 9 月、大連市人民政府発展研究センター、立命館大学東北アジア

地域研究センターは、国際産・官・学連携組織「東北アジア地域協力研究推進機構」を設立した。それ以来、両センターは、研究調査やシンポジウムの開催などの学術交流を行ってきた。

立命館大学はこれまでの東北財経大学との学術交流協定に加えて 2005 年、大連理工大学、大連外国語学院と交流協定を締結した。この間、様々な形で大連にある重要な大学との間で、様々な教育、学術の交流が行われている。ここ数年大連からの学生を迎えるだけでなく、立命館大学、APU の学生が夏休みや春休みを利用して大連に出かけて様々な研修プログラムに参加している。

これまでの学術交流の実績の上に、2009 年 11 月立命館大学国際地域研究所、東北アジア地域研究センターと大連人民政府発展研究センターは、「研究交流推進の協定」を結んだ。

この「研究交流推進の協定」の締結を記念して、2010 年 6 月 25 日の『日中国際シンポジウム「大連地域における産業集積の変化」』が、大連市人民政府発展研究センター、立命館大学国際地域研究所、東北アジア地域研究センターの主催で開かれた。今回の学術交流は立命館と大連市との広範な交流の一環であり、今後の定期的な学術交流、大連・京都の国際的・地域連携の一層の強化が期待される。

予算の執行状況

教研報酬 100,000、国内交通費 23,860、消耗品費 2,472、会議渉外費 6,640 計 132,972 円

実施項目⑬：立命館創始 140 年・学園創立 110 周年記念国際シンポジウム

「グローバル危機後の新たな東アジア構築」実施

シンポジウムは東アジアの統合について、ASEAN+3 の位置と役割、ヨーロッパの歴史との比較、北朝鮮問題を中心とする安全保障問題の取り扱い、FTA の形態、市民社会形成との関わり、と同じ問題をさまざまな角度から論じたもので極めて立体的な議論ができたと思われる。

また、ゲストでお呼びした劉江永氏は現在、日中両国政府の協力で設立されている日中友好 21 世紀委員会の委員で、日中関係にも強い影響力を持つ人物であり、従来、清華大学国際問題研究所との協力関係もあまり強くなかったことから、協力関係の開拓も大きな成果であった。Hyung-Kook KIM 氏はアメリカン大学および淑明女子大の両方において立命館大学と緊密な協力関係を築き上げた立役者の一人であり、また、沈銘輝氏は所長で中国における東アジア共同体構想の代表的論者である張蘊嶺氏の推薦に基づき、お招きしたもので、中国社会科学院アジア太平洋研究所との協力関係の強化にもつながった。

予算の執行状況

教研報酬 106,497、国内交通費 212,490、国外交通費 156,039、委託費 635,400、消耗品費 9,295、その他雑費 10,920、印刷費 121,196、会議渉外費 104,274、兼職本俸 48,400 計 1,404,521 円

本年度の予算執行合計

23,025,644 円

(本年度当初予算合計

24,286,000 円)

3. その他、特記事項がある場合のみ記載してください。

とくになし

2010 年度 事業報告書
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	立命館大学国際言語文化研究所
研究所長名	Charles FOX

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額	国際言語文化研究所では下記の通りそれぞれのプロジェクトを分類し受け入れている。 Aプロジェクト: 学内研究支援制度によるプロジェクト研究 Bプロジェクト: 言文研萌芽的プロジェクト研究 (研究所独自の研究支援プロジェクト) Cプロジェクト: 科学研究費補助金による研究プロジェクト
科学研究費補助金	2 件 (892 万円)	C1: ジェンダー研究会 (基盤研究(B): 572 万円) 「バックラッシュ時代の平和構築とジェンダー」 C2: 21 世紀風景論研究会 (基盤研究(B): 320 万円) 「『認識と『構築』の自然の風景像-21 世紀の風景論』 ※上記金額は、いずれも 2010 年度直接経費のみ。
その他外部資金	2 件 (70 万円)	B1: ヴァナキュラー文化研究会 (サントリー文化財団研究 助成: 50 万円) 「『語りえない人々の語り』に関する超域的研究」 A3: 立命館明治文学研究会 (不二出版奨学寄附金: 20 万)
学内助成	4 件 (850 万円)	A1: 日本人の国際移動研究会 (基盤研究: 200 万円) 「1930-40 年代アメリカ合衆国における日本人移民・日系 アメリカ人の監視・排除・管理・統合」 A2: 日本人の国際移動研究会 (R-GIRO: 500 万円) 「第二次世界大戦による在外日本人の強制退去・収容・ 送還と戦後日本の社会再建に関する研究」 A3: 立命館明治文学研究会 (基盤研究: 100 万円) 「山田美妙プロジェクト-山田美妙関連資料の公開と研 究」 A4: プロレタリア芸術研究会 (基盤研究: 50 万円) 「プロレタリア芸術運動における身体・労働表象および大 衆性・共同体に関する総合的研究」
研究所萌芽的 プロジェクト研究 (研究所予算より 支出し学内に公募)	7 件 (120 万円)	B1: ヴァナキュラー文化研究会 (20 万円) B2: グローバル空間形成研究会 (20 万円) B3: 文学と文化の翻訳研究会 (20 万円) B4: 占領開拓期文化研究会 (20 万円) B5: ヴィジュアルリティ研究会 (10 万円) B6: 後期水戸学史料研究会 (10 万円) B7: 植民地ネットワーク研究会 (20 万円)

2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	1 件	台湾政治大学との研究交流 7 月 19 日に台湾政治大学より黄錦容氏を招き研究交流に向けた打ち合わせを開催し、情報交換、意見交換、今後の研究交流に向けた確認を行った。 ※各プロジェクトによる研究ネットワークの形成については、「2.今年度の活動経過」(実施項目)を参照。
研究会実施状況	63 回	A1、A2: 日本人の国際移動研究会 10 回 A3: 立命館明治文学研究会 1 回 A4: プロレタリア芸術研究会 1 回 B1: ヴァナキュラー文化研究会 2 回 B2: グローバル空間形成研究会 3 回 B3: 文学と文化の翻訳研究会 2 回 B4: 占領開拓期文化研究会 4 回 B5: ヴィジュアルリティ研究会 3 回 B6: 後期水戸学史料研究会 32 回 B7: 植民地ネットワーク研究会 1 回 C1: ジェンダー研究会 4 回 C2: 21 世紀風景論研究会 2 回 ※各プロジェクトによる研究会の詳細については、「2.今年度の活動経過」(実施項目)を参照。
3. 成果発信		
学術図書出版	1 件	研究所の出版助成制度により出版 『狼女物語－美しくも妖しい短編傑作選』 ウェルズ恵子 (編集) 出版社: 工作舎 (2011/3/21) ※各プロジェクトによる学術図書出版の詳細については、「2.今年度の活動経過」(実施項目)を参照。
学術論文		※詳細については「2.今年度の活動経過」(実施項目)を参照。
学会発表		※詳細については「2.今年度の活動経過」(実施項目)を参照。
シンポジウム・講演会・企画等	9 件	A1、A2: 日本人の国際移動研究会 1 回 A3: 立命館明治文学研究会 1 回 A4: プロレタリア芸術研究会 1 回 B1: ヴァナキュラー文化研究会 2 回 B3: 文学と文化の翻訳研究会 1 回(震災の為延期) C1: ジェンダー研究会 1 回 C2: 21 世紀風景論研究会 2 回
紀要発行	4 回	立命館言語文化研究 22 巻 1～4 号(1 号あたり 500 部を発行)
4. 人材育成		
PD・RA の雇用	3 名	ポストドクトラルフェロー 1 名 藤田拓之 氏(A2: 日本人の国際移動研究会)

		<p>リサーチアシスタント 2名 禧美智章 氏(A3:立命館明治文学研究会) 雨宮幸明 氏(A4:プロレタリア芸術研究会)</p>
院生のPJ参加	17名	<p>A3:立命館明治文学研究会 2名 A4:プロレタリア芸術研究会 1名 B2:グローバル空間形成研究会 2名 B3:文学と文化の翻訳研究会 1名 B4:占領開拓期文化研究会 3名 B5:ヴィジュアルリティ研究会 1名 B6:後期水戸学史料研究会 4名 C2:21世紀風景論研究会 3名</p>
5. 社会貢献活動		
公開講座の実施	12回	<p>連続講座 全4回 「グローバル・ヒストリーズ—国民国家から新たな共同体へ」(11月) 土曜講座 7回 「在日ノンジャパニーズ日本研究家が見た日本文化」(5月)、「グローバル・ヒストリーズ」(3月) イアン・F・マクニーリ氏講演会(1月)</p>
学協会の運営、事務局業務		<p>A1、A2:日本人の国際移動研究会 日本移民学会年次大会開催の引き受け、及びラウンドテーブル主催 B5:ヴィジュアルリティ研究会 崎山政毅:社会思想史学会・代表幹事(学会長) C2:21世紀風景論研究会 仲間裕子:美学会委員、国際版『美学』編集委員、アジア芸術学会理事、<i>The Journal of Asian Arts and Aesthetics</i> 編集委員会委員、滋賀県立芸術劇場びわこホール理事</p>

1. 今年度の活動経過

実施項目①:A1、A2 日本人の国際移動研究会 代表者:米山裕

計画の実施状況

- (1)研究会の実施:2011年度は合計10回の研究会を開催し、研究会メンバーが各自の研究計画に基づいて遂行した研究成果を報告した。また2011年2月の研究会では、移民研究に幅広く利用可能と考えられる「GIS(地理情報システム)」の勉強会を行い、GISに対する研究会メンバーの知見を深めるとともに、実際の研究にどのように利用していくかを検討した。
- (2)日本移民学会年次大会開催の引き受け、及びラウンドテーブル主催:日本移民学会第20回年次大会(2011年6月26・27日、於立命館大学)の開催を引き受け、開催校企画として研究会が中心となり、ミニシンポジウム「ラウンドテーブル③在外日本人・日系人の強制移動を問い直す」を主催した。
- (3)在米日系移民のデータベース化:数多く発行されている在米日系移民の記録や年鑑から、個人レベルでの移民のデータベース化を進めた。今後における他の移民研究への応用も念頭に置いて、これからの同種のデータベースのテンプレートとなるような項目立てや記載内容など、随時検討しつつ作業を進めている。なお、実際の入力作業は派遣社員が行っている。
- (4)一次史料の収集:2010年度は、主な史料をとしては以下を「2010年度研究共通資料・大型」として申請し、認可され利用可能となった。
・「米国・カナダ・ハワイ日本人移民新聞稀少マイクロコレクション」(20タイトル全92リール)

予算の執行状況

(1)基盤研究

国内出張旅費 37,780円 図書費 165,167円 人件費 1,152,658円
消耗品費 633,595円 印刷費 10,800円

(2)R-GIRO

国内出張旅費 301,940円 図書費 41,518円 消耗品費 577,152円
印刷費 28,080円 その他 51,310円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

(1)研究会実施状況

第1回 4月24日(土)13:00-18:00 於キャンパスプラザ京都

報告:藤田拓之氏(立命館大学)

「戦前期上海における外国人居留民社会—共同租界行政をめぐるイギリスと日本の関係を中心に」

第2回 5月22日(土)13:00-18:00 於京都私学会館

報告:佐藤量氏(大阪市立大学)

「戦前中国における日本人学校出身中国人の同窓会ネットワーク構築に関する研究」

書評会:酒井一臣著『近代日本外交とアジア太平洋秩序』(昭和堂、2009年)

評者:米山裕氏(立命館大学) コメント:酒井一臣氏(堀川高校)

- 日本移民学会第20回年次大会ラウンドテーブル打ち合わせ
ラウンドテーブル3「在外日本人・日系人の強制移動を問い直す」
第3回 6月20日(土)13:00-18:00 於京都私学会館
報告:石田智恵氏(立命館大学)
「70-80年代アルゼンチンにおける”ニセイ”の位置と動き」
日本移民学会 第20回年次大会 ラウンドテーブル打ち合わせ
ラウンドテーブル3「在外日本人・日系人の強制移動を問い直す」
第4回 7月17日(土)13:00-18:00 於京都私学会館
報告:マイケル・ジン氏(立命館大学)
「日系アメリカ人の国際移動と強制収容:ツールレークの帰米二世を中心に」
小川真和子氏(水産大学校)
「第二次大戦中におけるハワイの水産業の崩壊と復興へ向けての布石」
今野裕子氏(南カリフォルニア大学)
「トランスナショナル・ローカリズム:戦前カリフォルニアへの日本人移民の
出移民、適応、およびナショナリズムにおいて」
第5回 10月16日(土)13:00-18:00 於京都私学会館
報告:河原典史氏(立命館大学)
「カナダ太平洋鉄道の日本人契約移民—ロジャース峠雪崩事故の百回
忌に関わって—」
轟博志氏(立命館アジア太平洋大学)
「朝鮮仁川における日本人定住者の属性」
第6回 11月22日(土)14:00-18:00 於キャンパスプラザ京都
報告:園田節子氏(神戸女子大学)
「中国移民の移動のハブ地における史料の残存と蓄積:カナダ基礎調
査により」
朴美貞氏(国際日本文化研究センター)
「京城に吹く博覧会旅の風:吉田初三郎の『朝鮮博覧会絵図』を中心
に」
第7回 12月25日(土)11:00-18:00 於キャンパスプラザ京都
報告:関根真保氏
「1930、40年代の上海におけるユダヤ人移住の経緯と『上海ゲッター』の
設置まで」
坂口満宏氏(京都女子大学)
「戦後移民」をめぐる研究の系譜・覚書」
南川文里氏(立命館大学)
「日本人移民はどのように「人種」と出会ったか?:1920年代の移民メデ
ィアとアメリカ人種主義」
第8回 1月22日(土)13:00-18:00 於京都私学会館
報告:根川幸男氏(ブラジル大学)
「地域を越えた日系移民教育史の可能性」
宮下敬志氏(立命館大学)
「演出された「文明化」:アメリカ先住民教育における変身写真と変身パ

レードの効用」

第9回 2月11日(金)10:00-17:00 於立命館大学衣笠キャンパス

講師:飯塚隆藤(立命館大学)

「第1回 GIS 講座 移民研究のための GIS—GISに触れる、学ぶ、活用する」

第10回 3月26日(土)14:00-18:00 於立命館大学衣笠キャンパス

研究会参加者の来年度の研究計画報告

来年度の研究会予定の打ち合わせ

(2)その他の研究ネットワークの構築活動

日本の文化財の海外移動について研究するアート・リサーチセンター所属研究員との連携(2011年度の研究会で報告予定)

上海の日本人居留民研究について、「大陸新報研究会」(代表:大橋毅彦関西大学教授)及び「上海史研究会」(代表:高綱博文日本大学教授)との連携(双方の研究会メンバー(含 PD)が相互に報告。より綿密な連携を検討中)

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

(1)著書

神谷浩夫・轟博志編、『現代韓国の地理学』、古今書院、2010年。

根川幸男『海を渡った日本の教育—戦前期ブラジルにおける日本の教育文化の越境と再創—』、国際日本文化研究センター、2010年。

(2)論文等

OGAWA, Manako, 'The Japanese and the Development of the Fisheries in Hawaii, 1900-1920', *The Hawaiian Journal of History*, vol.44(2010), pp.57-80, 査読有。

小川真和子、「ハワイにおける日本人漁業者排斥について—太平洋戦争期を中心に」(『地域漁業研究』第51巻第2号、2011年、69-89頁)、査読有。

坂口満宏、「戦後日本の移民問題」(『人権と部落問題』第811号、2011年2月、6-15頁)、査読無。

坂口満宏、「統計資料・1930年代の広島県に在留した日系二世」(『史窓』第68号掲載予定)、査読無。

酒井一臣、「外交の民主化と国際協調主義 「国民外交」論を中心に」(『史林』第94巻第1号、2011年1月)、査読有。

園田節子「世紀転換期サンフランシスコにおける華僑アイデンティティ創生と「華」の表出」(『中国研究月報』第65巻第2号、2011年2月、4-16頁)査読有。

轟博志「歴史地理学における朝鮮陸上交通の研究」(『交通史研究』第72号、2010年10月、55-73頁)査読有。

轟博志「朝鮮王朝時代の陸上交通路に対する歴史地理学的復原手法」(『立命館地理学』第22号、2010年、59-74頁)査読有。

轟博志「『距京程里表』の内容類型と系統に関する研究」(『大韓地理学会誌』45-5、2010年、647-668頁)査読有。

NEGAWA, Sachio, 'Tipologia e Característica das Instituições Educacionais Nikkeis no Brasil do Período Pré-Guerra', *Anais do XX ENPULLCJ no Brasil*, 20(2010), pp.303-310. 査読有。

朴美貞「二つのモニュメントで考える負の歴史—忘憂里「浅川巧の墓」と京都「耳塚」」(白朝鐘編『韓国を愛した日本人浅川巧』、BOOKO出版、2011年)。

朴美貞「吉田初三郎の「朝鮮博覧会絵図」に見る京城の空間」(稲賀繁美『東洋意識 夢想と現

実とのあいだ 1894-1953』、ミネルヴァ書房、2011年発行予定)。

FUJITA, Hiroyuki, 'Foreign Communities and the Municipal Administration of the Shanghai Settlement' (『国際シンポジウム2010 東アジアの近代と文化形成 報告集』、2011年)査読無。

藤田拓之「書評:『上海ゲッター』とはなんだったのか:関根真保著『日本占領下のユダヤ人ゲッター』」(『東方』356号、2010年10月、30-33頁)。

南川文里「市民」の境界、シヴィックな越境:排日運動期の日系移民とシヴィック・リアリズム」(『アメリカ史研究』第33号、2010年、59-75頁)査読無。

南川文里「移民、エスニシティ、多文化社会」(奥田宏司・佐藤誠・原毅彦・文京洙編『エティック国際関係学』、東信堂、2011年、143-161頁)。

MINAMIKAWA, Fuminori, 'Book Review: Cultural Migrants From Japan: Youth, Media, and Migration in New York and London, by Yuiko Fujita, Lanham: Lexington Books, 2009', *International Journal of Japanese Sociology*, vol.19 (2010), pp.140-142.

(3)学会報告・シンポジウム等

和泉真澄「イエローパワーの音楽を越えて—ノブコ・ミヤモトの舞台芸術に見る「人種」と「越境」—」(アメリカ学会第44回年次大会、2010年6月5日、於大阪大学)。

和泉真澄「非勢力圏の日本人・日系人強制移動の総合的研究の意義および課題について」(日本移民学会第20回年次大会、2010年6月27日、於立命館大学)。

和泉真澄「アジールとしてのエスニック宗教空間—ロサンゼルス洗心寺における文化アクティビズム—」(日本アメリカ史学会第7回(通算35回)年次大会、2010年9月19日、於東京女子大学)。

IZUMI, Masumi, "“You could be My Son!”: Border-defying Bodies in Nobuko Miyamoto's A Grain of Sand' (American Studies Association Annual Meeting, 20 November 2010, at San Antonio, Texas, USA).

佐藤量、米山裕、和泉真澄「ラウンドテーブル 3「在外日本人・日系人の強制移動を問い直す」」(日本移民学会第20回年次大会、2010年6月27日、於立命館大学)。

園田節子「海外の中国人—支え生きる工夫と空間」(井植記念会垂水文化講座、2010年10月18日、於井植記念館ホール(神戸))。

園田節子「北米華僑資料の保存・編集・公開と現地マイノリティとしての中国移民」(京都大学地域研究統合情報センター関連地域研究プロジェクト「『必要不可欠なアウトサイダー』からみる地域像」第3回研究会、2010年12月18日、於東京外国語大学アジア・アフリカ研究所)。

園田節子「華僑史料論の試み:カナダにおける史料収蔵・公開の過去と多文化主義の現在」(神戸華僑華人研究会第132回例会、2011年1月22日、於神戸中華総商会会議室)。

関根真保「石上玄一郎と上海」(神戸・ユダヤ文化研究会第二回文化講座、2010年9月23日、於こうべまちづくり会館)。

根川幸男「戦前・戦中期ブラジル都市日系社会におけるバイカルチュラリズム—小林美登利の「伯化」のゆくえと聖州義塾をめぐる実験—」(日本移民学会第20回年次大会、2010年6月27日、於立命館大学)。

根川幸男「ブラジルにおける日系エスニックタウンの形成と性」(日文研共同研究「性欲の社会史」、2010年7月3日、於日文研)。

FUJITA, Hiroyuki, 'Foreign Communities and the Municipal Administration of the Shanghai Settlement' (Cultural Configurations in Modern East Asia, The 2010 International Symposium, 20 November 2010, at Doshisha University).

MINAMIKAWA, Fuminori, 'Vernacularizing Racism: Japanese Immigrants and the Language of Race' (International Workshop: Racial Representation of Japanese/Asian Americans, 8 January

2011, at Tokyo Office of Kyoto University).

米山裕「日系移民史」の新しい課題:「移民」から「国際移動」へ(2010 年度文化史学会大会、2010 年 12 月 4 日、於同志社大学)。

実施項目②:A3 立命館明治文学研究会 代表者:中川成美

計画の実施状況

本プロジェクトは本年没後百周年を迎える明治の文学者、山田美妙に関する諸事業を促進させるためのものである。山田美妙と本学の関わりは、創立者中川小十郎と大学予備門時代に同級であったことから、この期の文学的出発を共に告げたことに始まる。その縁から没後、中川の主導によって立命館出版局から 1935 年に『山田美妙選集』2 巻が出版され、また多数の関係資料(宛書簡を中心とした貴重なマニュスクリプトを含む)を本学図書館で所蔵している。本年度のもっともおおきな事業は財団法人日本近代文学館にて 2010 年 10 月 2 日から 11 月 27 日まで催された「草創期のメディアに生きて—山田美妙没後百年」への参画である。本学資料が多数貸し出すこともあり、本学の役割は重いものとなっている。また関連図録の出版と研究会の組織、展覧会打ち合わせ、関係事業のアルバイト雇用、ポスター制作が主たる活動であった。

予算の執行状況

国内出張旅費 518,370 円(主に研究調査、打ち合わせ、会場設営)

図書資料 11,300 円 人件費 29,800 円 謝金 75,000 円

ポスター制作委託費 216,300 円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

本プロジェクトを推進するに当たって、明治文学研究会を組織、関係する専門領域の第一線の研究者に呼びかけて、組織された。ここで展覧会資料として集まった山田美妙関係資料に関する研究の緒が開かれたといえる。というのは没後にこれだけの資料(主たるものは日本近代文学館所蔵塩田良平文庫、早稲田大学図書館本間久雄文庫、本学基調図書資料)が一堂に会するのは空前絶後のことであり、二度と訪れないと思われる。この期を利用して国文学資料館の協力のもとに基本データベースの充実が図られ、また資料分析も格段の進歩を遂げたのは喜ばしい。主たるメンバーは宗像和重(早稲田大学)、谷川恵一(国文学資料館)、青木稔弥(神戸松蔭女子学院大学)、中丸宣明(山梨大学)、小林幸夫(上智大学)、山本和明(相愛大学)などである。

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

まず、2010 年 10 月発行の近代文学館特別展覧会図録『草創期のメディアに生きて—山田美妙没後百年』(臨川書店発行)がり、10 月 27 日には記念シンポジウムが日本近代文学館ホールにて催された。また当日のことは、2011 年 10 月発行の『文学』(岩波書店)にて特集が組まれる予定である。また臨川書店から『山田美妙集』全 12 巻の企画が進行しており、順調に進めば 2012 年 4 月に第一回配本となる予定である。

本事業に関する関心は高く、読売新聞等のメディア配信が既にあったが、今後明治初期の文学環境の問題からもますますの関心が寄せられていくものと思われる。明治期文学研究の新しい方向を指し示すものとして、注目が高まっていくものとする。

その他特記事項

人材育成にかかわる成果として、本学院生(ドクター)の参加、および早稲田大学、総研大学院生の参加があった。

実施項目③:A4 プロレタリア芸術研究会 代表者:村田裕和

計画の実施状況

2010年12月5日に、研究会と上映会を兼ねた公開企画「能勢克男8mm映画全作品上映」(充光館301号、10:30-18:30)を行った。多数の市民の方を含め74名の参加者があった。

プロレタリア作家・エディターの貴司山治に関する資料収集および資料調査をすすめた。その成果を含むかたちで2011年1月に『貴司山治全日記DVD版』および、その別冊として『貴司山治研究』が不二出版より刊行された。

予算の執行状況

国内出張旅費 75,290円 図書資料 273,210円 人件費 16,000円
謝金 3,333円 消耗品 25,707円 印刷費 26,460円 委託費 52,500円
その他 27,500円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

2010年12月5日(日)

公開企画「能勢克男8mm映画全作品上映」

(充光館301号、10:30-18:30)

協力:能勢協氏、総合企画:雨宮幸明

上映:全31作品上映

研究発表:藤井祐介、佐藤洋、雨宮幸明

報道:『京都新聞』朝刊(12月2日)文化欄に紹介記事掲載

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

2011年1月20日

貴司山治研究会編『貴司山治研究』(不二出版)刊行

収録:内藤由直「戦時下の生活と通俗歴史小説の大成」

村田裕和「戦後、「暗い谷間」の時代」 (その他)

2011年3月14日

村田裕和『近代思想社と大正期ナショナリズムの時代』(双文社出版)刊行

実施項目④:B1 ヴァナキュラー文化研究会 代表者:ウェルズ恵子

計画の実施状況

4月に言語学分野のワークショップ、11月に文学分野の講演会を開催した。ワークショップの成果は『立命館言語文化研究』22巻2号の小特集で公表した。また、同紀要のヴァナキュラー文化研究会特集号に向け、メンバーから原稿を募り、合評会を開催した。

予算の執行状況

図書費 84,773 円 国内旅費 66,712 円 謝金 37,500 円 その他 11,015 円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

2010年4月23日のワークショップ(②-1に報告)では、学内外から学生や院生を含む多くの参加者があり活発な議論がなされた。別分野の研究者が、このワークショップをきっかけに学术交流できた。次回の企画についても、懇親会の席で話し合いが行われた。

2010年11月25日の講演会(②-2に報告)は、オーストラリア・ニュージーランド文学会との共催で、オーストラリアよりアジア系文学研究者を招聘して開催した。本講演会を通じて、国内のオーストラリア文学研究者との学术交流を行うことができたほか、オーストラリアのアジア・太平洋文学研究グループとのネットワークを築くことができた。

2011年3月23日、学而館研究会室にて研究会を開催した。研究会メンバー4名、院生・PDオブザーバー2名の参加を得て、2010年度の活動総括、11年度の活動方針の確認、『立命館言語文化研究』ヴァナキュラー文化研究会特集号寄稿論文の合評を行った。

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

(1) ワークショップ「グローバリゼーション時代の日本語:その感性と活力」

4月3日 諒友館 839 参加者 60名

本シンポジウムの成果は『立命館言語文化研究』小特集「グローバリゼーション時代の日本語:その感性と活力」(22巻2号, pp.97-179)にて公表。

(2) アリソン・ブロイノウスキー公開講演会

「トランスナショナルな英語文学—オーストラリアのアジア系作家たち—」

“Writing the Shared Hemisphere: Recent Asian Australian Fiction”

11月25日 創思館カンファレンスルーム 参加者 48名

講演者: アリソン・ブロイノウスキー(オーストラリア国立大学・ウロンゴン大学上級研究員)

(3) プロジェクト特集号掲載論文以外の関連出版業績(著者の五十音順)

ウェルズ恵子

「「ブルーズ君」の語ること——初期カントリーブルーズの歌詞を読む」『文学』(岩波書店)(11巻6号) 2010年

“The Role of Buddhist Song Culture.” Williams and Moria, eds. *Issei Buddhism in the Americas*. U of Illinois P, 164-81.

『狼女物語』工作舎(編著) 2011年

恐怖から希望へ——物語と、歌と音楽と』『バラク・オバマの文学——自伝が語る人種とアメリカ』彩流社 2011年(6月刊行予定)

江川ひかり

「徴税請負制度に立ち向かう遊牧民—西北アナトリア、ヤージュ・ベディルの事例から」『歴史と地理(No.636):世界史の研究』224巻 1—15頁 2010年

「19世紀中葉西北アナトリア、バルケスイル地域における遊牧民の経済状況—1840年『資産台帳』の分析を中心に—」『駿河台史学』142号 25—57頁 2010年

小長谷英代

「パフォーマンス理論—「ポスト」領域の民俗学—」『日本民俗学』263号, pp.124-152 2010年
“Taiko Performance,” IN *Encyclopedia of Asian American Folklore*, eds. J.H.X.Lee, and K.Nadeau, Santa Barbara, CA: ABC-CLO, 645-646. 2010.

Sato, Wataru.

“Celebrating Forgery in Peter Carey’s Theft: A Love Story.” 『南半球評論』第 26 号 51-61
2011 年

関口英里

「都市型大規模イベントとメディアをめぐる仕掛け」『レジャーレクリエーション研究』第 65 号
2010 年

田中寛

「戦争記憶と歴史認識—体験、証言、記憶の連鎖について」「戦争体験という語り」『戦争記憶
と歴史認識 未決の戦争責任・戦後責任論のために』(第 3 部) 私家版
「中国大陆における宣撫工作としての日本語教育—松永健哉『日語学校』の言語的記憶」『指
向』第 8 号 2011.3 『大東文化大学大学院外国語学研究科 日本言語文化学専攻誌』

Nishiyama, Atsuko.

2010. “English and Japanese Stative Expressions in the Past.” JELS 27, pp.197-206.
and Jean-Pierre Koenig. 2010. What is a perfect state?” *Language* Vol.86, No.3. pp. pp.611-646.

宮下和子

翻訳監修 *Cross-Cultural Communication through Music 1* (音楽で異文化コミュニケーション 1)
鹿屋体育大学外国語教育センター 2011 年

翻訳監修 *Cross-Cultural Communication through Music 2~America Keeps Singing* (歌い継ぐ
アメリカ) 鹿屋体育大学外国語教育センター 2011 年

♪YES WE CAN♪が歌い継ぐ歴史コミュニケーション 『九州コミュニケーション研究』第 8 号,
10-20. 日本コミュニケーション学会九州支部 2010 年

Kazuko Miyashita.

“America as Understood through Foster’s Songs in Foreign Cultures~Foster’s Music as
Japanese Cultural Heritage,” 研究報告『言語と文化』第 8 巻 1 -10、鹿屋体育大学外国語教
育センター 2011 年

その他特記事項

2011 年度から PD1 名と前期課程の大学院生が参加する。研究発表や講演会準備などを通して
積極的に研究会運営にかかわらせる予定である。同時に論文の執筆、査読つきのメディアにおけ
る出版なども積極的に促していく。

実施項目⑤: B2 グローバル空間形成研究会 代表者: 高橋秀寿

計画の実施状況

下記(研究会開催状況)の通り、研究会を合計 3 回開催した。他の研究会やプロジェ
クト研究などに広く参加を呼びかけ、参加を得ている。

予算の執行状況

国内旅費 97,100 円 謝金 99,999 円 消耗品費 209 円 印刷費 2,000 円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

研究会開催状況

第 1 回研究会 2010 年 7 月 26 日(学而館第 3 研究会室)

報告: 高橋秀寿(本学教員)「今年度の研究会活動について」

報告: 高野麻子(一橋大学大学院博士課程)「移動する身体の管理と同一空

間の形成——指紋法の歴史的変遷をめぐって」
第2回研究会 2011年1月28日(学而館第3研究会室)
報告:小野清美(大阪大学教員)「ナチス東方政策と景観エコロジー」
報告:高野麻子(神戸大学教員)「植民地ツーリズムから見る空間イメージ」
第3回研究会 2011年3月7日(学而館第3研究会室)
報告:渡辺裕(東京大学教員)「「ノイズ」言説・再考——ジントとチンドンをめぐ
る表象の生成と変容」
報告:和泉浩(秋田大学教員)「グローバル空間とコロニアリズムをめぐる諸問
題」

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

この点に関してはまだ具体的な成果をあげていないが、今後はシンポジウム、成果発表を計画している。

その他特記事項

人材育成の成果としては、第一回研究会で、院生が研究報告を行ない、また参加者の3割程度が院生であった。

実施項目⑥: B3 文学と文化の翻訳研究会 代表者: 佐藤=ロスベアグ・ナナ

計画の実施状況

研究会を10月と11月の2回実施した。残念ながら3月11日に起こった大地震のために3月19日に予定していた国際シンポジウムは延期したが、さらに国際的なネットワークは広がった。各研究会には立命館大学のみではなく他大学の教員や院生も参加し、研究会には毎回20名強の参加者があった。

予算の執行状況

旅費(国外) 83,358円 その他 7,000円
(合計執行学は90,358円。予算額20万円で中残額109,642円は2011年度予算に繰越)

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

研究会開催状況

第1回研究会 10月1日(金)午後17:00～ 存心館707
第2回研究会 11月27日(土)午後14:00～ 創思館401・402

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

2011年11月に延期して開催予定の国際シンポジウムの成果の一部を英語書籍(佐藤=ロスベアグ他編)にして刊行予定。

その他特記事項

各研究会には立命館大学だけではなく他大学の院生も参加し、研究会には毎回20名強の参加者があった。

実施項目⑦:B4 占領開拓期文化研究会 代表者:内藤由直

計画の実施状況

2010年度は、(1)資料調査、(2)研究会活動、(3)学外競争的資金への応募を計画していたが、全て当初の予定通りに実施することができた。

具体的には先ず、(1)研究内容に関係する図書を計14冊購入するとともに、プロキノ映画フィルムの修復・内容確認を行った。次に、(2)年度内に計4回の研究会を開催し、8人のメンバーによる研究発表・議論を行った。そして、(3)学外競争的資金へはプロジェクト副代表の村田裕和を研究代表者として、科研費(基盤研究C:研究課題名「占領開拓期文化の記録と表現」)へ応募した。

また、学外での成果発表およびウェブサイトによる研究会活動の報告を積極的に行い、研究成果の社会的還元を果たすことができた。

プロジェクト期間終了後も活動は継続していくことを決定し、2011年度以降も研究会を実施していく予定である。

予算の執行状況

国内出張旅費 60,720円 図書資料 82,313円 消耗品(コピー用紙) 582円
委託費(フィルム修復費) 52,500円 その他(会場使用料) 3,885円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

研究会実施状況

第1回研究会(参加者12名) 2010年7月29日(木) 15:00~18:00

立命館大学衣笠キャンパス学而館第2研究会室

【内容】

今後の活動方針について

(報告)雨宮幸明「花やしき所蔵フィルム調査報告—『山宣渡政労農葬』の修復経緯について—」

第2回研究会(参加者14名) 2010年9月25日(土) 14:00~19:30

立命館大学衣笠キャンパス学而館第2研究会室

【内容】

(研究発表)内藤由直「野間宏と〈国民文学〉論」

(研究発表)村田裕和「貴司山治の占領開拓期文学について」

(研究発表)伊藤純「貴司日記に見る『小林多喜二全集』の形成過程」

第3回研究会(参加者13名) 2010年12月4日(土) 15:00~18:00

立命館大学衣笠キャンパス学而館第2研究会室

【内容】

(研究発表)鳥木圭太「『混血』という表象——佐多稲子「分身」をよむ」

(研究発表)和田崇「権力と向き合う日本人——中野重治「おどる男」論」

第4回研究会(参加者18名) 2011年2月26日(土) 13:00~17:00

ラポール京都(京都労働者総合会館)第2会議室

【内容】

(研究発表)友田義行「戦後占領と安部公房」

(研究発表)雨宮幸明「能勢克男の映画『疎水』の背景」

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

(1)学術論文

内藤由直「野間宏の抵抗と革命——戦後国民文学論の同時代性——」(『社会文学』/日本社会文学学会(第33号) pp.59-70 2011年2月)

鳥木圭太「感情と階級意識について——中野重治の福本イズム継承をめぐる——」(『梨の花通信』/中野重治の会 近刊予定)

※『立命館言語文化研究』(23巻3号)に「プロジェクトB4 研究報告」として、メンバーの論文をまとめて投稿・掲載する予定である。

(2)学会発表

雨宮幸明「プロキノ映画『山宣渡政労農葬』における映像編集に関する考察——京都花やしき所蔵フィルムをてがかりに——」(2010年度日本近代文学学会関西支部秋季大会 2010年11月6日 於・奈良教育大学)

池田啓悟「『雑沓』系列の射程——宮本百合子「雑沓」「海流」「道づれ」をめぐる——」(昭和文学学会第47回研究集会 2010年12月11日 於・お茶の水女子大学)

鳥木圭太「動揺する語り手の位相 ——佐多稲子「分身」をよむ」(昭和文学学会第47回研究集会 2010年12月11日 於・お茶の水女子大学)

その他特記事項

(1)情報発信

「占領開拓期文化研究会ホームページ」を作成・公開した。

(URL: <http://senryokaitaku.okoshi-yasu.com/index.html>)

今後の活動についてはは、「占領開拓期文化研究会ブログ」

(URL: <http://senryokaitakukibunka.blog.fc2.com/>)において情報発信を行っていく。

(2)大学院生のプロジェクト参加

研究会には毎回、後期・前期課程の大学院生が多数参加し、研究発表ならびに全体討論に積極的に参加した。研究会には学外からも参加者があり、院生が外部の研究者と交流する機会を設けることができた。

プロジェクトへ参加してもらうことで、共同研究の遂行について肌で知る機会を大学院生に提供できた。このことは、今後のプロジェクト研究の核となる人材を育成することに寄与したと思われる。

実施項目⑧: B5 ヴィジュアルリティ研究会 代表者: 崎山政毅

計画の実施状況

今年度は研究代表者の崎山を中心として、将来的な外部競争的資金に応募するための国内での研究ネットワークおよび出版社とのネットワークの組織化にとりくんだ。とりわけ、法政大学経済学部・久野量一教授、東京大学大学院総合文化研究科・石橋純教授、摂南大学教授・安藤哲行氏、および岩波書店編集部・阪本政謙氏、平凡社編集長・松井純氏、水声社編集長・下平尾純氏らとの研究上の討議と今後の計画についての打ち合わせを成功裏におさめることができた。

予算の執行状況

資料費 8,400 円 国内出張旅費 73,840 円 印刷費 17,760 円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

先にも述べたように、法政大学経済学部・久野量一教授、東京大学大学院総合文化研究科・石橋純教授、摂南大学教授・安藤哲行氏、ら本邦を代表するラテンアメリカ研究者との研究上の討議と今後の計画についての打ち合わせを成功裏におさめることができた。

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

岩波書店編集部・阪本政謙氏、平凡社編集長・松井純氏、水声社編集長・下平尾純氏らと、成果発信・翻訳刊行などについての基礎固めのための議論で確固たるつながりを形成しえた。

その他特記事項

ヴィジュアルリティ研代表者・崎山が同じく研究代表を務める科研基盤(C)「ラテンアメリカにおける視覚文化の政治学」(平成 21-23 年度)との連動を意識的におこなった。

人材育成については、2011 年度以降の科研費などとの連携の下で積極的に追求する予定である。

研究代表者・崎山が社会思想史学会・代表幹事(学会長)として、プロジェクトの基本構想とつながりうる研究領域と架橋を形成しつつ活動をおこなった。また、同じく崎山が『情況』『インパクション』など学術雑誌に翻訳を掲載、さらに、本学夏の高大連携企画、本学 3 月土曜講座で言文研の連続講座との連携のもとでの講演をおこなった。

実施項目⑨: B6 後期水戸学史料研究会 代表者:奈良勝司

計画の実施状況

後期水戸学の代表的な学者豊田天功の手による編集記録「新聞」「国事記」の解読・分析作業を進めた。本史料は、後期水戸学という思想史はもちろん、政治史、情報論、文化・風俗にも関わる多角的な検討が可能な良質の史料である。また、くずし字も基本に忠実な誤字・脱字も少ないもので、大学院生を中心にくずし字の解読作業にも適当な史料であり、参加メンバー一人一人の訓練も兼ねて、原則週一回、2時間程度の研究会を開催した。曜日は毎週火曜日で、年明けからは参加者のスケジュールの関係上、木曜日に行った。9月に行った合宿も含めて、相当の量を読み進め、「新聞」のうちの一冊を読了した。

予算の執行状況

9月6～7日にかけて、滋賀県高島市の白浜荘において、研究会合宿を行い、史料を集中的に読み進めるとともに、その背景について参加メンバー間で議論する場を設け、また参加者相互の交流を深めることができた。その際の経費は、交通費 16680 円、その他(宿泊費)81250 円であった。また、史料とその読み本、関連資料等をまとめるためのバインダーを中心に、消耗品費 2070 円を計上した。

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

本学大学院 OG で現東京芸術大学大学院博士後期課程1回生の丸山彩氏と学術交流を設け、東京で関連の研究会を開催するとともに、複数回にわたって当方の研究会にもゲスト参加してもらい、情報・意見交換を行った。

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

代表者奈良勝司が、『立命館大学言語文化研究』第三号に、本研究会の成果として、史料紹介の側面も備えた関連論文を投稿する予定である。

実施項目⑩: B7 植民地ネットワーク研究会 代表者:河原典史

計画の実施状況

今年度の研究は、次年度以降の基礎研究に位置づけられる。活動内容は以下の通りである。

(1)史料調査

今年度は旧帝国圏内の学校事情について全体的に把握することを目的として史料調査を進めた。国内では、旧帝国圏内の学校資料を収集している玉川大学にて資料調査を実施した。とりわけ、関東庁編『第26統計書』(1931年)などの統計資料から就学状況を調査した。

また上海でも史料調査を実施した。上海での史料調査は、上海档案馆と上海市図書館にて実施し、まず共同租界、フランス租界、華界の3つの学校エリアに分類した。なかでも学校教育が盛んだった1920年代～1940年代にかけての資料を収集した。

(2)フィールド調査

上海での現地調査を実施した。上海調査では、上海租界研究の第一人者である東華大学人文学院陳祖恩教授およびその学生とともに、上海市内の歴史地区を巡検した。とりわけ虹口地区の日本人集住地区やフランス租界の学校所在地を中心に調査し、学校分布状況を把握した。

(3)研究発表

研究会では研究発表を実施した。佐藤量「戦前上海をめぐる学校教育史と同窓会研究の射程」(2011年1月15日、修学館1F京都学プロジェクト室にて)。本発表では、上海における資料調査の方法や活用状況また、戦前上海の学校教育に関する研究動向をまとめ、今後さらに研究を深めていくための基礎情報を共有した。

また佐藤量は上海滞在中にも研究報告を実施している。上海師範大学中国近代社会研究中心にて、「近代中国人留学生に関する問題」と題した報告をした。

予算の執行状況

図書費 30,495 円 国内旅費 46,140 円 海外旅費 38,177 円
消耗品費 61,318 円 印刷費 23,778 円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

上海における海外調査にて、上海の大学と研究ネットワークを構築した。東華大学(陳祖恩教授)、上海師範大学(銭杭教授)らがすすめる上海教育史研究グループと連携して、今後も研究を継続する。

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

佐藤量「近代中国人留学生に関する問題(仮題)」マイグレーション研究会編『1930年代における来日就学生の体験』(2011年刊行予定)

実施項目①: C1 ジェンダー研究会 代表者: 秋林こずえ

計画の実施状況

言文研秋季連続講座《グローバル・ヒストリーズ》第3回(2010年11月19日)において、研究会メンバーの崎山政毅(文学部)が司会、坂本利子(産業社会学部)および柴田修子(同志社大学)が報告者をつとめ、グローバル・ジャスティスにおいて女性がはたす役割の重要性をジェンダーの観点から論じた。これは言文研ジェンダー研究会と「女性・戦争・人権学会」との共催で同年12月19日に本学創思館カンファレンス・ルームで開催された国際シンポジウム「バックラッシュ時代の平和構築とジェンダー: 女性国際戦犯法廷から10年を迎えて」との緊密な連動において実施されたものである。前者で南アフリカと中米グアテマラの具体的な事例と証言を主要なテーマとしたことによって、後者の議論が日本軍性奴隷＝「従軍慰安婦」の運動がもつグローバルな普遍性をより明らかにできた。また、それとならんで、東アジアでのジェンダー研究の連携・協働がラテンアメリカ・アフリカとの同時代的な通底性を明示しえたことは言文研に求められる社会的・時代的要請の観点から見ても大きな成果といえる。

予算の執行状況

図書費 315,114 円 国内出張旅費 645,989 円 国外出張費 1,344,603 円
謝金 1,001,211 円 消耗品費 74,966 円 その他 15,720 円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

以下のとおり、研究会を開催した。

第1回ジェンダー研究会

7/9 18:00-20:00 恒心館2階725教室

平和研究になぜジェンダー・アプローチが必要なのか: 関連性と挑戦

報告者: Lee Daehoon(韓国聖公会大学兼任教授、参与連帯事務所長、立命館大学国際関係学部客員教授)

通訳: 朴伸次(ニューヨーク州立大学ビンガムトン校社会学研究科)

コーディネータ: 池内靖子(立命館大学産業社会学部教授)

第2回ジェンダー研究会

7/15 18:00-20:00 朱雀キャンパス2階204号教室

The symbolic and Communicative Function of International Criminal Tribunals –Sexual Violence in War and Ethnic Conflict–

国際刑事裁判所における象徴機能・伝達機能—戦時及び民族紛争における性暴力—

報告者: テレサ・ゴッドウィン・フェルプス教授(アメリカン大学ロースクール Washington College of Lae 教授、立命館大学法科大学院客員教授)

司会: 池内靖子(立命館大学産業社会学部教授)

コーディネータ: 松本克美(立命館大学法科大学院教授)

第3回ジェンダー研究会

9/10 17:00~19:00 同志社大学博遠館304番教室

2000年代韓国における女性政策・法律の変革と、バックラッシュ

報告者: 朴宣映(韓国女性政策研究所研究員)

コメント: 岡野八代(同志社大学)

第4回ジェンダー研究会 9/30 16:30-19:00 修学館2階 国際言語文化研究所所長室前会議室

上映とトーク: 「ペルーにおけるアーティストの闘い」—ドキュメンタリー映画、AGAINST THE GRAIN: AN ARTIST'S SURVIVAL GUIDE TO PERU について

報告者: Ann Kaneko (ドキュメンタリー映像作家)
司会: 池内靖子 (立命館大学)

実施項目⑫: C2 21世紀風景論研究会 代表者: 仲間裕子

計画の実施状況

講演会 2010年11月 立命館大学学術館
ジアレ・エルツェン氏(トルコ、アンカラ、ミドルイースト工科大学建築学科教授)
「オスマントルコ帝国古典期の建築」
「メタモルフォシス Metamorphosis (変容)— グローバル化とイスラムの都市」
研究会 2011年2月 立命館大学学術館
六人部昭典氏(実践女子大学文学部教授)
「印象 impression の位置」
米村典子氏(九州大学工学部准教授)
「ギュスターヴ・カイユボットの‘死せる自然’」
講演会 「クレーと自然」2011年3月14日 立命館大学アート・リサーチセンター
ヴォルフガング・ケルステン氏(チューリヒ大学美術史研究所教授)
「パウル・クレー—自律的な有機体としての芸術作品」
ベティーナ・ゴツケル氏(チューリヒ大学美術史研究所教授)
「クレーの実験芸術: 絵画的実践と自然的生成過程」
司会: 池田祐子氏(京都国立美術館主任研究員)

予算の執行状況

図書費 85,459円 国内出張旅費 192,160円 国外出張費 378,240円
謝金 292,555円 消耗品費 580,554円 その他 120円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

上記の通り、研究会・講演会を計3件開催した。

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

学術図書出版 1冊、学術論文 8本、学会発表 3件

その他特記事項

The Journal of Asian Arts and Aesthetics, Vol.4の特集: "Nature and Landscapes"
を編集し、2011年3月に出版。

人材育成についての成果として、社会学研究科院生2名、先端学術総合研究科研究生1名のプロジェクトへの参加があった。

実施項目⑬: 小笠原歴史研究会 代表者: Charles FOX

計画の実施状況

2010年度の主な目標は「The Navy Generation」というドキュメンタリー映画の題材になるインタビューなどを撮影することであった。この一年間で父島に行ったのは4回で、撮影時間数で言えば既に47時間分を撮るのができた。その他は第2回小笠原研

究者円卓会議に参加し、計画及び実施するのに貢献した。

予算の執行状況

国内出張旅費 268,000 円 図書資料 100,000 円

研究ネットワークの構築(研究ネットワーク形成、研究会実施状況等)

島嶼共生系学際研究還(Consortium for the Interdisciplinary Study of Human and Nature Symbiosis in Island Systems)に招聘されて、メンバーとなった。

成果発信(学術図書出版、学術論文、学会発表、シンポジウム等)

2010.11.20 第2小笠原研究者円卓会議に参加し、「The Navy Generation」の試作発表。

2011.2.19 島嶼共生系学才研究環(Consortium for the Interdisciplinary Study of Human and Nature Symbiosis in Island Systems)の研究環の国際ワークショップで「The Navy Generation」の第2試作発表。

2011.3 「Empire at the Margins: Ogasawara(Bonin)Islands as the Gateway to the South 帝国の周辺: 南洋への入口としての小笠原諸島モダニズム研究会: モダニズムの世界化と亡命・移住・難民化」の特集を立命館大学の国際言語文化研究所の紀要『言語文化研究』に掲載。

その他特記事項

2011.3.26 立命館大学の土曜講座として「グローバル・ヒストリーズ」の総テーマで小笠原諸島の「欧米系」について講演し、「The Navy Generation」の第3試作発表。

実施項目⑩: 立命館創始 140 年・学園創立 110 周年記念 秋期連続講座「グローバル・ヒストリーズ—国民国家から新たな共同体へ」第1シリーズ

計画の実施状況

学内研究助成への申請から展開した「グローバル・ヒストリーズ: 国民国家から新たな共同性へ」を今年度からの新・連続講座として11月の4週にわたり開催した。各回20~40名程度の参加があった。本企画を研究所の各プロジェクトが協働するプロジェクトとして位置づけ、今後多年にわたる「連続講座」として開講し広く社会に公開し、また、各々の講座内容は、書籍シリーズ化を視野に入れ、まずは研究所紀要に特集として掲載する。

以下開催の詳細。

日時: 2010年11月5・12・19・26日 開場 16:00 開催 16:30~19:00

会場: 立命館大学創思館1階 カンファレンスルーム

第1回 11月5日(金)

グローバル・ヒストリーズとは何か—トランスアトランティック-トランスパシフィックな視点をもとに

司会: 南川文里(立命館大学)

基調報告: 米山裕(立命館大学)「海を越えることの意味—トランスアトランティック-トランスパシフィックな歴史研究の成果と可能性」

コメント: 崎山政毅(立命館大学)

第2回 11月12日(金)

日本を《太平洋》から眺める

司会: 崎山政毅(立命館大学)

報告:石原俊(明治学院大学)「小笠原-硫黄島から日本を眺める」
森宣雄(聖トマス大)「沖縄-奄美から日本を眺める」

コメント: Charles FOX(立命館大学)

第3回 11月19日(金)

平和構築のために—ジェンダー・アプローチの可能性

司会:池内靖子(立命館大学)

報告:柴田修子(同志社大学)「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ
—中米グアテマラにおける民衆裁判の取り組み」

坂本利子(立命館大学)「南アフリカの真実和解委員会と女性たちの証言」

コメント:崎山政毅(立命館大学)

第4回 11月26日(金)

カリブは周縁か

司会・コメント:西成彦(立命館大学)

報告:中村隆之(東京外国語大学)「『高度必需』とは何か?—フランス海外県からポストコロニアル状況を考える」

久野量一(法政大学)「キューバでアンティールを考える」

鈴木慎一郎(関西学院大学)「カリブ海のユートピア/ディストピア」

その他特記事項

連続講座の成果は『立命館言語文化研究』に掲載し、さらにその中から良質なものを選んで書籍シリーズとして刊行する方向で、ミネルヴァ書房と話し合いを詰めている。

実施項目⑮:立命館土曜講座企画(5月、3月)

計画の実施状況

国際言語文化研究所として、立命館土曜講座を下記の通り5月、3月の全7回担当した。

「在日ノンジャパニーズ日本研究家が見た日本文化」(5月)

5月8日(第2935回)

「在日ノンジャパニーズ日本研究家が見た北原白秋」

文学部・教授 チャールズ・フォックス

5月15日(第2936回)

「大衆文学の批評空間—ドイツにおける欠如と日本における確立:菊池寛と直木三十五を中心に」

同志社大学言語文化教育研究センター・准教授 ベティーナ・ギルデンハルト

5月22日(第2937回)

「世界文学として、野坂昭如の『エロ事師たち』と『とむらい師たち』

静岡大学・専任講師 スティーブ・コルベイ

5月29日(第2938回)

「在日アメリカ人社会言語学者が見た日本の単一文化論」

関西大学文学部・教授 野口 メアリー

「グローバル・ヒストリーズ—新しい歴史展開の模索」(3月)

3月12日(第2968回)

「グローバル・ヒストリーズとは何か」

文学部・教授 崎山 政毅

3月19日(第2969回)

「コーヒーの味は歴史が決める?—グローバル・ヒストリー的アプローチ」

文学部・非常勤講師 小澤 卓也

3月26日(第2970回)
「小笠原諸島の欧米系とグローバル・ヒストリーズ」
文学部・教授 チャールズ・フォックス

実施項目⑩: イアン・F・マクニーリ氏講演会

計画の実施状況

各国で絶賛を博した『知はいかにして「再発明」されたか』の著者であるイアン・マクニーリ氏を招き講演いただいた。講演では、マクニーリ教授の新たな研究対象であるヴィルヘルム・フォン・フンボルトを中心に、言語のグローバル・ヒストリーについてお話していただいた。紀要23巻の2号特集に掲載予定である。

「イアン・F・マクニーリ氏講演会」

1月28日 16:30-19:00 末川記念会館講義室

主催: 国際言語文化研究所

共催: 日経BP

「Wilhelm von Humboldt and the World of Languages」

イアン・F・マクニーリ(オレゴン大学教授)

実施項目⑪: 研究所萌芽的研究プログラム

計画の実施状況

研究所独自の公募制研究助成プログラムを実施した。運営委員による審査を行い、採択者には科研費など外部資金申請と学会報告を義務付けた。1件あたり最大20万円/年とし7件を採択した。本学専任教員に加え、学内制度にて雇用されているポストドクトラルフェローについても公募の対象とした。2011年度も継続して予算を計上し公募を行う予定である。

予算の執行状況

研究所予算より、1,200,000円を支出

実施項目⑫: 研究所紀要発行

計画の実施状況

立命館言語文化研究22巻1~4号(1号あたり500部を発行)

研究所の研究プロジェクトの研究成果及び学内教員の人文社会科学分野の研究成果を紀要としてまとめ、学内外に発信、一部査読制(公募論文)。大学院生については、研究所のプロジェクトに参加した場合に教員からの推薦に基づき、投稿を認める。

予算の執行状況

研究所予算より1号あたり約1,000,000円(500部)で年間4号の刊行。

実施項目⑱: 研究所出版助成制度

計画の実施状況

一年に1~2件の出版助成(1件につき70万円)を行っている。研究所プロジェクトとしての成果による出版について、希望者を募り原稿の内容と目次一覧を明記した申請書により運営委員会にて審議の上、採否を決定している。本年度は、『狼女物語—美しくも妖しい短編傑作選』ウェルズ恵子(編集) 出版社: 工作舎(2011/3/21)が採択され助成・出版された。

予算の執行状況

一件につき70万円を助成する。年間最大140万円。研究所予算。

実施項目⑳: 研究所図書集書

計画の実施状況

主に文学、ジェンダー、移民関係書を収集、研究所の集書方針にあった書籍を研究所運営委員会にて各教員より希望を募り購入した。

予算の執行状況

研究所と所予算 500,000円

本年度の予算執行合計

9,405,598円

本年度当初予算合計

10,359,000円(執行率91.2%)

※2010年度は別途、「立命館創始140年・学園創立110周年・APU開学10周年記念企画の採択を受け780,000円の予算措置を受けた。

その他 特記事項

2010年度国際言語文化研究所所長報告(Charles FOX)

2010年は立命館大学国際言語文化研究所にとっては転換期であった。2009年度まで続けてきた大きな研究プロジェクトから社会的要請と新しい学術的展開に即した新しい中心的テーマが必要であるという見解に企画委員会が合意した。そのテーマとして「グローバル・ヒストリーズ: 国民国家から新たな共同性へ」を設定し、新しい連続講座を2010年11月に開いた。本研究所の各プロジェクトが共同で11月の4週にわたりこのテーマについてそれぞれの観点から発表した。それに関連して2011年1月に『Reinventing Knowledge: From Alexandria to the Internet』の著者 Ian McNeely をアメリカのオレゴン大学から招聘して「Wilhelm von Humboldt and the World of Languages」をテーマに講演会を開いた。さらに2011年3月に同じ「グローバル・ヒストリーズ」として3回にわたり立命館大学土曜講座も実施した。2010年の講座等の内容を2011年度の『立命館言語文化研究』に特集として掲載し、さらに社会に公開する予定である。

プロジェクト研究の方では2009年の成功を踏まえ、研究所独自に行っている萌芽的プロジェクト研究の枠をさらに広げ、学内全教員以外に本学衣笠総合研究機構所属のポストドクトラルフェローに研究代表者になる資格を与えて、新しいプロジェクトを募集した。成果はそれぞれの萌芽的プロジェクト研究報告に載っているが、研究所の構想として成功を収めた。

また、出版活動は「狼女物語」の一冊を発行した。紀要『立命館言語分研究』については2010年度シンポジウムやプロジェクト研究成果を中心に22巻1・2・3・4号の計4冊を例年通り刊行した。

2010 年度 事業報告書
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	人間科学研究所
研究所長名	松田 亮三

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	<small>上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額</small>	
科学研究費補助金	25 件 (49,206,000 円)	基盤 A×1 件、基盤 B×2 件、基盤 C×11 件、萌芽研究 2 件、若手 B×8 件、新学術×1 件
その他外部資金	11 件 (35,680,000 円)	舞鶴市 110 万円 受託研究 戦略的研究基盤形成支援事業 2,300 万円
学内助成	8 件 (7,695,000 円)	R-GIRO 500 万円、基盤研究 269 万円
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	0 件	
研究会実施状況	11 件	男性介護研究会、放課後研究会、高齢者支援チーム研究・報告会、発達支援チーム研究会、他 7 件
3. 成果発信		
学術図書出版	16 件	『行動分析学研究アンソロジー2010』『どうつくる？障害者総合福祉法—権利保障制度確立への提言』他 14 件
学術論文	25 件	査読付論文 15 件、査読無論文 10 件
学会発表	37 件	海外学会発表 6 件、国内学会発表 31 件
シンポジウム等	9 件	招待講演会対人援助における協調と融合（参加 42 名）、公開シンポジウム家庭内暴力をのりこえる「家族臨床理論」の構築にむけて（参加 96 名）、「脱ひきこもり」支援 FSJG 講演会（参加 85 名）、男性介護研究会シンポジウム（参加 43 名）、他 5 件（のべ 482 名）

紀要発行	2件	掲載論文総数：21号では14件、22号では9件 投稿論文総数：21号では24件、22号では18件
4. 人材育成		
PD・RAの雇用	0名	
PD・RAの就職(常勤)	0件	
院生のPJ参加	57名	
5. 社会貢献活動		
公開講座の実施	12件	公開講座シネマで学ぶ「人間と社会の現在」のべ12回(参加のべ452名)
一般刊行物発行	3件	『高齢者の心と体 ケアに生かすQ&A』、『よくわかる教育相談』 『カウンセリングを語る』
初等・中等教育との連携	0件	
学協会等との連携	1件	対人援助学会、男性介護者と支援者の全国ネットワーク
審議会等委員	5名	京都府男女共同参画審議会委員、内閣府困難を有するこども・若者の支援者調査企画分析会議委員、厚生労働省薬害HIV遺族等実態調査委員会委員、日本学術振興会研究成果の社会還元・普及事業推進委員、守山市障害者自立支援審議会委員
6. その他		

2. 今年度の活動経過

* 具体的な内容を記述してください。

実施項目①：対人援助に関わる総合的研究の戦略的推進

計画の実施状況

2010年度は、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、「大学を模擬社会空間とした自立支援のための持続的対人援助モデルの構築」プロジェクトは、学部を超えた39名の専任教員の参加により実施している。同プロジェクトでは、以下の3つのテーマを推進している。以下に示す3つのテーマに関わる研究を実施した。

- ① 大学をアクティブなシミュレーションの場とした高齢者・障害者への対人援助の実証的研究（地域社会に求められる支援環境を「先取り」しそれを大学という地域資源を利用して多角的に分析する「アクティブ・シミュレーション」を、高齢者の活動支援、障害学生の教育バリアフリー支援、障害者の就労支援等を場面に実施・研究する）。
- ② ニーズの多様化と支援の再構成－ケアする人のケアのためのコミュニティをとおして（男性介護者、若者の逸脱行動への対応、家族援助ニーズに応えるボランティアやNPOなどの素人援助者、当事者が要援助者を支援する自助活動等に関わって、ニーズの多様性、支援の再構成、支援の広がりとかケアコミュニティ、を研究する）
- ③ 情報アーカイブとキャリアパスポートによる情報の蓄積と移行システムの構築（地域に永続する組織として、大学が個人の情報アーカイブを作ることに関わって、当事者がハンドルできる情報保存システムの構築、研究倫理・情報倫理の検討、地域住民の大学への参加のあり方を研究する）。

これらの研究は、京都を場面とする研究から、ベトナム・中国・韓国などの国際共同研究も含んでいた。

資料として、主要開催研究会、論文の一覧を添付する。

予算の執行状況

国内出張旅費251万円 実験用器具等消耗品1,290万円 図書資料247万円、他 計2,300万円

実施項目②：委託・受託研究の実施

計画の実施状況

社会に開かれた研究機関として、広く人間と社会に関わる総合的・学際的研究課題について、政府・自治体・民間企業等からの受託研究・共同研究を遂行した。主な、委託元は下記の通り。

- ・ (財)京都市ユースサービス協会(共同研究)
- ・ JSPS「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」(受託研究)
- ・ JST「研究開発成果 実装支援プログラム」(受託研究)
- ・ 舞鶴市2件(受託研究)
- ・ NPO法人 アラジン(受託研究)
- ・ (財)日本生命財団「高齢社会実践的研究助成」
- ・ (株)公文教育研究会(奨学寄附金)

予算の執行状況

出張旅費573万円 人件費・諸謝金212万円 消耗品等102万円、他計1,268万円

実施項目③：戦略研究分野の選定

計画の実施状況

2010年度は、2013年度以降の戦略的研究分野を定めるために、予備的な意見交換を執行部で実施した。

実施項目④：国際研究機関連携の推進

計画の実施状況

2009年度に引き続き、JSPS「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」の採択を受けて、カウンターパートであるハノイ師範大学（ベトナム）および北京師範大学（中国）等でセミナーを開催し、研究交流を図り、研究連携が進められた。その他にも、JICAプログラムとも連携し、協働的な研究交流が行われた。

予算の執行状況

外国旅費360万円、他 計500万円（本予算は、項目②に含む）

実施項目⑤：研究成果の発信：紀要『立命館人間科学研究』の発行

計画の実施状況

2010年度は、7月と2月に『立命館人間科学研究』第21号と第22号を発行し、ウェブにも掲載した。第21号には、研究論文11本、実践研究1本、研究ノート2本を、第22号には、研究論文7本、実践報告1本、研究ノート1本を、掲載した。従来通り外部査読者を含む二人の査読者において査読した上で掲載を決定している。プロジェクト研究論文（課題別研究論文を含む）のほか、人間科学に関する基礎研究並びに応用・実践・臨床研究に寄与する内容の一般研究論文を掲載し、研究所の研究成果を発信した。大学院生の投稿数も年々増加の一途をたどっており、若手研究者の研究教育の一翼を担っていると言える。

予算の執行状況

印刷費105万円 査読料22万円 送付料5万円 計132万円

実施項目⑥：社会連携の推進および研究成果の還元

計画の実施状況

研究所の研究活動を企業や自治体、および一般にわかりやすく紹介するため、各種会議の案内、エッセイ、などを中心にウェブの更新を継続して行った。また、「大学を模擬社会空間とした自立支援のための持続的対人援助モデルの構築」プロジェクトのウェブを新たに設置し、成果の一部を掲載した（『家族介護者支援を考える-日本と英・豪・米の比較研究』）。

web ページについては、障害者に対する情報保障に係る研究活動を推進し、またさらにアクセシビリティをさらに高めるようリニューアルを検討した。

予算の執行状況

委託費42万円

実施項目⑦：研究情報基盤の整備：研究所所蔵図書収集

計画の実施状況

研究所の研究分野関連図書を広く収集し、情報の蓄積を図った。購入状況は下記の通り。

【雑誌】（継続購読）

・和書：29 件

・洋書：30 件

【図書】

・和書：2 件

・洋書：1 件

予算の執行状況

図書資料費 350 万円

その他特記事項

本年度の予算執行合計

42,412,932 円

（本年度当初予算合計

6,598,000 円）

3. その他、特記事項がある場合のみ記載してください。

（字の大きさは 10.5 ポイントで、A4 版 1/2 ページ程度で記載してください）

2010 年度は、2-①でも記したように、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「大学を模擬社会空間とした自立支援のための持続的対人援助モデルの構築」の採択を受け、それに伴い、当研究所の中心研究施設である創思館の 2 階の大幅な改築を行った。

創思館 2 階南側の従来の個別研究ブースであった空間を、「社会臨床実習室」とし、飲食店および一般店舗の機能を有する擬似店舗の仕様に工事改築し、それに必要な設備・調度も準備された。また 3 階の中心部に「キャリア支援アーカイブ室」が設けられ、セキュリティを保てる「個人情報」の保管・管理のための基本ハードが設定された。さらに同 2 階の北西側には、既存のものより面積の広い汎用性の高い第 4 トレーニングルームが設置された。

上記の施設においては、すでに複数のプロジェクトが、京都市内の学校教員や当事者（保護者や高齢者を含む）と様々な連携的な共同研究を年度後半にスタートした。これらの研究では、従来の地域内における実践研究やインターンシップとは異なり、徹底的に構造化された環境と計画的なデザインの下で、当事者（障害のある個人や高齢者）の「キャリア支援」に必要な支援設定を実証的・分析的に同定することができる。そして「キャリア支援アーカイブ室」の機能に象徴されるように、当事者自身が支援者と協同して自らのポートフォリオをどのように作成しハンドルできるか、という地域における当事者を中心とした「個人情報」のマネジメントの方法も実証的に検討することができる。

これらの試みはこれまでにないものであり、ヒューマンサービスの領域に限らず、人間行動の关系的記述といった領域に関する基礎的研究であり、地域セクターにおける学融的研究の中で大学が固有に持つ機能の検証ともいえる。

2010 年度 事業報告書
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	アート・リサーチセンター
研究所長名	赤間 亮

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	<i>上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額</i>	
科学研究費補助金	26 件 (53,006,000 円)	基盤 A : 1 件 基盤 B : 13 件 基盤 C : 7 件 研究活動スタート支援 : 3 件 特別研究員奨励費 : 2 件
その他外部資金	22 件 (25,865,310 円)	受託研究 : 10 件・4,650,000 円 受託事業 : 1 件・9,000,000 円 (JSPS 若手研究者国際・トレーニング・プログラム) 奨学寄付 : 10 件・9,215,310 円 その他 : 1 件・3,000,000 円 (大英博物館)
学内助成	18 件 (42,880,000 円)	政策的重点 : 1 件 10,000,000 円 R-GIRO プログラム : 3 件・21,000,000 円 基盤研究 : 4 件・1,950,000 円 科研費連動型 : 1 件・500,000 円 若手スタートアップ : 3 件・2,300,000 円 研究成果の国際的発信強化 : 2 件・2,100,000 円 立命館創始 140 年・学園創立 110 周年記念企画 : 4 件・5,030,000 円
補助金	5 件 (210,451,000 円)	文科省グローバル COE : 134,292,000 円 文科省私立大学戦略的基盤形成支援事業 資源研 : 18,000,000 円 文科省私立大学戦略的基盤形成支援事業 工芸 P : 32,683,000 円 文科省私立大学経常費補助「研究施設」: 15,476,000 円 JSPS 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム : 10,000,000 円
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	1 件	大英博物館 : セカンドメント (出向) 契約締結。研究者 1 名がアシスタントキュレーターとして出向中。 また、過年度より継続して研究交流している機関との研究交流のうち、顕著なものあげる。 ・ ロンドン大学 SOAS : 海外派遣プログラムを利用した、人材派遣 (のべ 11 名) ・ 京都市、京都市景観・まちづくりセンターとの協働で行った「京町家まちづくり調査」の結果分析と成果発表 ・ CEEJA (アルザス欧州日本学研究所) との共催シンポジウム

		開催に向け、打ち合わせを実施 ・ アジア太平洋 DH centerNet ミーティングを開催し、該地域の DH 研究センターのネットワーク化を推進。
研究会実施状況	12 件	(研究会) 風俗画研究会、「うつしだされる島原—新出資料と花街研究」研究会、『兵範記』研究会、「外地」文学研究会、上方芸能研究会、京都俳諧研究会、データベース研究会、「近世視覚文化を読み解く」研究会 (ワークショップ) Japanese lacquer seminar、Negoro lacquer seminar、明日に活かす京町家—京町家まちづくり調査結果報告会&意見交換会、GIS ワークショップ (自治体職員向け)
3. 成果発信		
学術図書出版	7 件	シリーズ日本文化デジタル・ヒューマニティーズ 第 3 巻『京都の歴史 GIS』、他 6 件
学術論文	170 件	査読付論文 85 件、外国語論文 59 件
学会発表	213 件	海外学会発表 79 件、国内学会発表 134 件
シンポジウム等	6 件	参加者のべ 680 名
紀要発行	1 件	アート・リサーチ vol. 11
4. 人材育成		
PD・RA の雇用	32 名	PD 12 名、RA 20 名
PD・RA の就職 (常勤)	4 件	主な就職先: 京都府立総合資料館・学芸員、立命館大学情報理工学部・助教、群馬工業高等専門学校・助教、南山大学・研究員
院生の PJ 参加	21 名	
5. 社会貢献活動		
公開講座の実施	35 件	・ グローバル COE セミナー: 31 回 (参加者のべ 908 名) ・ 土曜講座 (1 月): 4 回 (参加者のべ 204 名)
一般刊行物発行	0 件	
初等・中等教育との連携	0 件	
学協会の運営、事務局業務	2 件	・ アート・ドキュメンテーション学会 (JADS) 関西事務局長: 赤間 (文) ・ 地理情報システム学会 大会実行委員長: 矢野 (文)
審議会等委員	0 件	
6. その他		

2. 今年度の活動経過

* 具体的な内容を記述してください。

研究プロジェクト1: グローバル COE「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」

1) 計画の実施状況

本拠点における研究は、基本的に、5つの研究班（京都文化、日本文化、歴史地理情報、デジタルアーカイブ技術、Web活用技術）に置かれた複数の研究プロジェクトごとに、メンバーを重複させながら実施している。新しい研究の型—文理融合型、研究班横断型プロジェクト、国際ネットワーク型—を展開することにより、グローバルな視点を持ち、国内外の別なく研究活動ができる新しいタイプの日本文化の若手研究者の育成を目指して活動しており、その成果は顕著である。

2) 予算の執行状況

雇用人件費 8,600 万円、研究支援アルバイト謝金 1,200 万円、図書資料 1,700 万円、若手研究者支援 1,000 万円、企画運営 100 万円、システム保守 60 万円、外国出張旅費 150 万円、国内出張旅費 210 万円、機器備品 290 万円、消耗品 120 万円【合計 13,430 万円】

3) その他特記事項

過年度採択された2つの海外派遣事業、即ち JSPS の「若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)」および「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム (大航海プログラム)」と、本拠点独自の助成の組み合わせにより、博士課程後期課程院生、PD などの海外派遣に対して、国際会議での発表といった短期のものから調査・研修のための中長期派遣まで、きめ細かな対応を行うことができた。結果、本拠点若手研究者の国際学会での発表件数も毎年増加し、本年度は 105 件を数えた。

研究プロジェクト2: 私立大学戦略的基盤形成支援事業「芸術・文化分野の資料デジタル化と活用を軸とした研究資源共有化研究」

1) 計画の実施状況

第1プロジェクト「1次資料デジタル化の効率化手法を応用した成長型ドキュメンテーション作成研究」ならびに、第2プロジェクト「デジタル図書館・アーカイブ・ミュージアムのデータ共有化に関する研究 [代表: 前田亮 (情報理工学部・准教授)]」の2プロジェクトを立ち上げ、さらに第1プロジェクトでは、「イメージデータベース研究グループ [代表: 赤間亮 (文学部・教授)]」、「立体資料のデジタルアーカイブ効率化研究班 [代表: 徐剛 (情報理工学部・教授)]」、「映像文化資源の蓄積、映像アーカイブ手法研究班 [代表: 富田美香 (映像学部・准教授)]」の3班に細分化して研究を実施した。

2) 予算の執行状況

研究支援アルバイト謝金 240 万円、図書資料 590 万円、外国出張旅費 250 万円、国内出張旅費 85 万円、学会参加費 65 万円、機器備品 150 万円、消耗品 360 万円、その他 60 万円【合計 1,800 万円】

3) その他特記事項

「1次資料デジタル化の効率化手法を応用した成長型ドキュメンテーション作成研究」では、国内所蔵機関だけでなく大英博物館、キオッソーネ東洋美術館等の国外大規模所蔵機関が所蔵する日本美術・芸術・文化研究資源のデジタルデータを蓄積し、Web共有型ドキュメンテーション

の作成と閲覧システムによる公開を大規模に展開した。その活発な研究活動は、新聞でも紹介された（「探せ！海外流出の浮世絵 立命大、欧米で調査」京都新聞，2010年6月12日）。また、平面記録を可能とする資源だけでなく、映像文化資源の蓄積と映像アーカイブについての研究も進め、東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催企画「フィルムセンター開館40周年記念発掘された映画たち2010」での上映・講演を通して注目を集めた（「文化 ホームムービー歴史の証言者に」『日本経済新聞』2010年6月5日）。

立体資料のデジタルアーカイブ効率については、立体資料の計測と提示について新たな方法を提案した他、「デジタル図書館・アーカイブ・ミュージアムのデータ共有化に関する研究」では、芸術・文化分野の各種デジタル資料共有化のためにインターネット上での多分野・多言語の横断検索に関する研究を行った。

研究プロジェクト3:私立大学戦略的基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」

1)計画の実施状況

第1プロジェクト「京都における工芸資料のアーカイブとドキュメンテーションの総合的研究」ならびに、第2プロジェクト「工芸における五感および感性にかかわる高次情報処理」、第3プロジェクト「京都の工芸資料に関するネット上での仮想展示と状況学習環境の構築に関する総合的研究」を立ち上げ、さらに細分化して研究を実施した。

2)予算の執行状況

図書資料 500 万円、研究支援アルバイト謝金 450 万円、委託費 300 万円、機器備品 180 万円、消耗品 1,500 万円、外国出張旅費 150 万円、国内出張旅費 60 万円、その他 128 万円【合計 3,268 万円】

3)その他特記事項

京都の工芸資料を収集し、その一部について補修・整備を行うとともに、デジタルアーカイブを行い、成果の一部を展示で報告した。検討・収集した工芸資料の種類幅を広げ、それぞれの工芸資料の関連性や意義についても多様な観点から検討を行い、アーカイブの方法についても検証を進めた。さらに、歴史都市の様々な地理空間情報の検討、工芸資料における五感および完成に関わる高次情報処理の検討を進めながら、工芸資料のデジタル化に関わる様々な技術的検討を進め、国内および国際会議や学術論文誌に発表した。また、工芸資料に関するネット上での様々な活用を目指した検討も合わせて進めた。

研究プロジェクト4:私立大学経常費補助金「研究施設」

1)計画の実施状況

「教育現場でのゲームニクスを利用した教材の学習効果についての研究 [代表：細井浩一(映像学部・教授)]」、「3D メタバースにおける住空間構築と居住者コミュニティの可能性と課題 [代表：細井浩一(映像学部・教授)]」、「浮世絵・版本の国際的資料アーカイブに基づく、近世視覚文化の総合的研究 [代表：鈴木桂子(衣笠総合研究機構・准教授)]」、「歴史都市の地理空間情報の GIS データベース構築研究 [代表：矢野桂司(文学部・教授)]」の4研究を実施した。

2)予算の執行状況

委託費 650 万円、機器備品 160 万円、図書資料 125 万円、消耗品 450 万円、その他 163 万円【合計 1,548 万円】

3) その他特記事項

「教育現場でのゲームニクスを利用した教材の学習効果についての研究」では、株式会社ベネッセコーポレーションとの産学連携による共同研究を行い、ゲームニクスの学習継続への効果について検証を進めた。さらに、「3D メタバースにおける住空間構築と居住者コミュニティの可能性課題」では、株式会社ハウスセゾンと立命館大学の産学共同研究として、3D メタバースの可能性と課題を検証した。

「浮世絵・版本の国際的資料アーカイブに基づく、近世視覚文化の総合的研究」では、本学において国際シンポジウム「Digital Iconography: Image Databases and the Study of Edo Print Culture デジタル・イコノグラフィー イメージデータベースと江戸出版文化研究」を開催し、新たな学問領域である Digital Iconography を提唱し、国内外での視覚文化研究に広く貢献した。

「歴史都市の地理空間情報の GIS データベース構築研究」では、GIS データベース研究利用の促進を図るために講演活動を行った。さらに、2010年11月に京都府総合資料館で発見された昭和2年の「京都市明細図」（縮尺 1/1200、291 枚）のデジタル化を行った。今後、京都府総合資料館と連携しながらその公開に向けた取り組みを行う計画である。

その他実施項目 1：立命館創始 140 年・学園創立 110 周年記念企画

1) 計画の実施状況：

本学創立記念企画公募にセンターとして申請した下記 4 本全てが採択された。①では年間を通して当センター内にある閲覧展示室にて 7 回の展覧会を開催し、当センター所蔵の貴重資料を一般に公開するとともに、各研究プロジェクトで蓄積した研究成果を発表した。②では展覧会と関連づけたものもあわせ、連続講演会として 5 本の企画を実施した。③、④の 2 本の国際シンポジウムは、研究成果、進捗状況を交換する良い機会となり、国内外においての将来的なネットワークの拡がりに期待できる成果となった。

①アート・リサーチセンター連続展覧会：

1. 祈祷と占い **Healing and Divination** —中世日本人の信仰—
2. 立命館大学アート・リサーチセンター新収蔵資料展—友禅下絵と乾板写真から—
3. 王朝の雅 平安から近世へ
4. 花供養と“京都の芭蕉”
5. 見る・読む・知る 歌舞伎と劇場
6. 京都の風景画と古地図
7. ビデオゲーム展 —電子化された「遊び」の世界—

②若手研究者企画 アート・リサーチセンター連続講演会：

1. デジタル化の潮流の中で: ハーバード・イェンチン図書館の場合
2. 書齋から栈敷へ——「東海道四谷怪談」のテキストとパフォーマンス
3. 講演会とパネル展示「文学・文化に見る韓国併合と「朝鮮」への眼差し—せめぎ合うイメージ、植民地帝国言説の両義性—
4. 海外若手研究者ミーティング「デジタル・ヒューマニティーズのいま×人文学研究のいま」
5. ゲームカンファレンス第 4 回

③国際シンポジウム「Digital Iconography イメージデータベースと江戸出版文化研究」

④国際シンポジウム「モーションキャプチャ技術と身体動作処理」

2) 予算の執行状況

研究支援アルバイト謝金 48 万円、委託費 20 万円、図書資料 30 万円、消耗品 130 万円、印刷費 43 万円、会議渉外費 47 万円、招聘旅費 140 万円、招聘謝金 25 万円、その他 17 万円【合計 500 万円】

3) その他特記事項

①、②とも看板、チラシ、ポスターといった従来型の広報に加え、Web を活用した広報を行った。特設ページを制作した他、Ustream や Twitter といったシステムを活用した広報を行い、一定の効果を収めることができた。

①の 1、2、3、4 については Web 上の展覧会でも公開したことにより、内外から高い評価を得ている。4 では、期間中に京都の芭蕉堂（現在閉鎖中）の開門を 20 年ぶりに実現した。また、本展覧会中に櫻井文庫、糸井文庫の他、個人蔵の『花供養』のデジタル画像及び翻刻データの公開を開始しただけでなく、解説を付けた図録も作成し、俳諧研究にとって貴重な文献資料を提供した。5 では重要文化財の金丸座（旧金毘羅大芝居）の近世期の劇場内部を CG によって仮想復元し、動画によるモニター展示を行った。

②の 3 では、韓国併合から 100 年にあたる本年、本学でも様々な関連する催しが行われた中で、視覚資料から見る韓国併合という切り口で分析することにより、従来の研究とは異なる独自の視点に立つ講演会を開催することができた。この企画については、毎日新聞に記事が掲載され、社会的にも注目度の高い企画であるということを示すことができた。

③ではカナダ・ブリティッシュコロンビア大学 (UBC)、イギリス・ロンドン大学 (SOAS) および当センターを拠点として 2 年間行ってきた「近世視覚文化を読み解く」研究会の成果を踏まえ、新たな学問領域として Digital Iconography を提唱し、図像研究における海外研究者の視点、国内の研究者の視点の特色を明らかにすること、それぞれの研究領域に資料のデジタルアーカイブがどのような役割を果たしてきたか、また、今後どのように関わっていくのかについて議論することを目的として実施された。参加者は教員、大学院生などの大学関係者も含めて日本、イギリス、ハワイ、カナダからと多彩な顔ぶれとなり、シンポジウムとあわせて大学院生のワークショップも実施したことで、特に本学の大学院生と海外、外部の若手研究者同士が、自身の研究成果、進行状況等を交換できる良い機会を提供できた。結果的に、国内外においての将来的な学術ネットワークの広がりが大いに期待される成果となった。

④では学部生や学外関係者も多く（約 70 名）参加し、注目度の高さが際だった。特に Daniel Thalmann 教授の文化遺産のバーチャルリアリティーや群衆シミュレーションのプレゼンテーションは最先端のもので高い関心を集めた。また、Christopher Bellaci 氏の「アバター」を始めとする映画製作やゲーム制作の紹介により、モーションキャプチャの現実的な問題が投げかけられた。身体動作およびモーションキャプチャという共通のシステムを用いているが、研究対象やアプローチは多岐に渡っており、国内外において今後のネットワークの広がりにも期待できるシンポジウムとなった。

本年度の予算執行合計

279,186,310 円

（本年度当初予算合計

279,186,310 円）

3. その他、特記事項がある場合のみ記載してください。

（字の大きさは 10.5 ポイントで、A4 版 1/2 ページ程度で記載してください）

- ・拠点所属の若手研究者に、JSPS 特別研究員 (PD)、学内 PD などに積極的に申請することを促

すとともに、前年度の研究実績を綿密に査定し、勤務日数や給与水準に反映して給与を決定するなど、若手研究者のモチベーションを高めるような工夫をした。PD の中には、京都府立総合資料館、群馬工業高等専門学校に就職した者、また大英博物館への出向者もあり、若手育成の効果は顕著である。

- 海外の日本文化研究者および研究機関との学術交流・コラボレーションは、ますます活発化してきている。2010 年度に海外から本拠点を訪問した研究者は約 60 名、このうち、10 名が滞在研究を行った。
- 北米を中心とした国際的な DH 関係拠点のネットワークである centerNet の要請をうけ、2009 年度より、東アジア・太平洋地区の DH 研究センターのネットワーク化を進めるべく、該当地域の代表的な DH 研究者が集まり、アジア太平洋 DH centerNet ミーティングを開催している。本拠点は日本の拠点の代表として、当初より参加している。
- 産官学の新たな共同研究についても、引き続き模索を行った。キシステム、キョーテック、ナック、ハウスセゾン、ベネッセなどの企業からは奨学寄附金として、また、関西経済連合会、京都観世会館、京都市景観・まちづくりセンター、京都産学公連携機構（文理融合・文系産学連携促進事業）からは受託研究として研究費を獲得した。
- センターの運営体制は、昨年度と同様、アート・リサーチセンター運営委員会（必要に応じて開催）と、GCOE 運営委員会（毎週開催）の両組織によって運営を行った。両委員会には重複する委員も多く、役割分担や連携に関して、支障なく順調に運営を進めることができた。
- 上述した研究プロジェクトを軸にした、政策的重点、提案公募型研究、R-GIRO プログラム、国際的成果発信などの学内資金を獲得し、多角的で広範な研究業績を累積した。
- 紀要発行、資料修復など、研究所運営に不可欠な活動に要する恒常的予算がないため、それらを外部資金で賄わざるを得ない。
- 当センターには、林美一コレクション（諸本が他に確認できない江戸期稀観書 5,000 冊や映画スチル写真）、藤井永観文庫（重文 5 点や天皇の宸翰を含む書画コレクション）、桜井コレクション（俳諧研究の重要コレクション）などに代表される多種多様な貴重書コレクションが収蔵されており、これらのデジタルアーカイブ化とその公開に努めている。しかしながら、収蔵庫の管理、修復、外部閲覧対応、資料図版提供などのマネジメントについては、専門家がおらず任期のある職員が対応している。一刻も早く専門員を配置する必要がある。

2010 年度 事業報告書
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	地域情報研究センター
研究所長名	鐘ヶ江秀彦（政策科学部・教授）

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	<i>上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額</i>	
科学研究費補助金	1 件 (2,600,000 円)	基盤 B：1 件（FY2008-FY2010） 研究テーマ：逆都市化における頑強性を高めるコンパクトシティ政策シミュレーションに関する研究 研究代表者：鐘ヶ江秀彦（政策科学部・教授）
その他外部資金	2 件 (受託額 2,730,000 円 委託額 300,000 円)	京都学園大学 300,000 円 委託研究（代表：鐘ヶ江秀彦（政策科学部・教授）） 松山市 2,730,000 円 受託研究（代表：宮脇昇（法学部・教授））
奨学寄付金	1 件 (1,196,000 円)	特定非営利活動法人アジアシード 1,196,000 円 鐘ヶ江秀彦（政策科学部・教授）
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	1 件	保津カーボンマイナス協議会（亀岡市）および龍谷大学と共同で「『亀岡市カーボンマイナスプロジェクト』炭を使った農業と地域社会の再生～市民が参加する地球温暖化対策」のプロジェクトを実施。
3. 成果発信		
学術論文	2 件	査読付論文 1 件、外国語論文 1 件
学会発表	4 件	海外学会発表 2 件、国内学会発表 2 件
シンポジウム等	5 件	カーボンマイナスプロジェクトに関わるシンポジウム 実施回数：延べ 5 回、参加者：延べ 450 名

研究成果公開	1 件	『亀岡市カーボンマイナスプロジェクト』にてホームページを運営。< http://6minus.jp/index.html >
4. 人材育成		
PD・RA の雇用	1 名	PD : 1 名
PD・RA の就職 (常勤)	1 件	主な就職先 : 総合地球環境学研究所研究員
院生の PJ 参加	2 名	
5. 社会貢献活動		
地域社会への 研究成果還元	1 件	CO2 削減となる「クールベジ」を関西地域各所にて販売を実施。 (「生活協同組合コープこうべ」(神戸市)、西本願寺での納涼祭(京都市)、みやこメッセでの地域力文化祭等) ※クールベジ : 炭を埋めた畑で栽培された野菜
6. その他		インドネシア政府から 4 名の客員研究員の受入 (受入研究者 : 鐘ヶ江秀彦(政策科学部・教授))

2. 今年度の活動経過

*具体的な内容を記述してください。

実施項目①:炭を使用した気候変動緩和と農山村振興を導く“カーボンマイナススキーム”研究

プロジェクト名称	亀岡カーボンマイナスプロジェクト
共同研究機関	亀岡市、龍谷大学
関連事業	農林水産省生産環境総合対策事業
研究代表者	鐘ヶ江秀彦(政策科学部・教授)
研究期間	2010年4月1日から2011年3月31日
目的・内容	農山村部における未利用バイオマスを用いた炭による炭素隔離を核として、都市部から農山村部へ資金還流を実現する社会システムの構築を目指す。 課題① 農山村部の未利用バイオマス資源簡易炭化システムを確立 課題② クールベジタブル農法“の技術と有効性を検証 課題③ 企業、農業者、生活者に受容可能な地域内 CO2 排出量取引制度の構築 課題④ 農作物のエコブランド化(クールベジタブル)戦略に基づく農村振興 システムの構築

実施項目②: バイオマス炭化物の田畑散布を通じた温室効果ガスの発生抑止実験

プロジェクト形態	委託研究
委託者	京都学園大学
委託額	300,000 円(税込)
研究代表者	鐘ヶ江秀彦(政策科学部・教授)
研究期間	2010年4月1日から2010年10月31日
目的・内容	<p>A. 土壌中の炭素隔離量の定量 炭堆肥を使用し各種作物(小麦・小松菜・大豆・米・ねぎ等)圃場およびポットにおける次の項目を検証する。</p> <p>① 土壌中有機・無機炭素量と経時変化 ② 炭堆肥(原料炭炭素量と成分分析、炭堆肥炭素量と分析) ③ 安全性確認試験(原料炭からの溶出試験等)</p> <p>B. 農作物生育実験 農地約 1.4haを対象としたフィールド試験およびポット試験により炭堆肥の使用による生育効果を検証する。</p> <p>C. 炭堆肥製造実験 牛糞堆肥製造時における炭の発酵促進作用等を検証する。</p> <p>D. 牛糞堆肥炭化実験 熱効率および炭化物の成分分析を行う。</p>

実施項目③: 坂の上の雲ミュージアムに関わる資料調査業務委託

プロジェクト形態	受託研究
委託者	松山市
委託額	2,730,000 円(税込)
研究代表者	宮脇昇(政策科学部・教授)
研究期間	2010年4月26日から2011年3月31日
目的・内容	坂の上の雲ミュージアムにおける展示および研究のための資料調査を目的とする。『坂の上の雲(著者: 司馬遼太郎)』の時代を、よくあらわすことができるような素材についての専門分野の研究を行い、その成果を坂の上の雲ミュージアムに収める。調査は、平成 23 年度の企画展に関わる、日露戦時における海外の新聞、雑誌の調査を主体とする。

3. その他、特記事項がある場合のみ記載してください。

2010 年度 事業報告書
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所
研究所長名	加地 伸行

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	<small>上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額</small>	
研究所予算	5,000,000 円	白川基金より支出
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成		全国で白川文字学の普及に努力されている教員や漢字研究者とのネットワーク作りは三年目を迎え、ネットワーク相互間での連携が行われ、その成果が現れ始めている。また、講師紹介等を通じて、様々な団体とのネットワーク構築を進めている。 ※詳細については、「2. 今年度の活動経過」を参照。
3. 成果発信		
著書・学術論文	15 件	※詳細については、「2. 今年度の活動経過」を参照。
シンポジウム等	1 件	白川静生誕 100 周年記念フォーラム(約 200 名参加)
紀要発行	1 件	『立命館白川静記念東洋文字文化研究紀要』第四号(2010 年 3 月 25 日発行)
4. 人材育成		
院生の PJ 参加		学部生・院生との研究会・学習会を開催し白川文字学の研究者育成に取り組んでいる。
5. 社会貢献活動		
一般刊行物発行等	6 件	平凡社より『入門講座 白川静の世界』(当研究所編)全 3 巻を出版。
漢字探検隊	12 回	詳細については、「2. 今年度の活動経過」を参照。
初等・中等教育との連携	3 件	滋賀県草津市立南笠東小学校および京都市立正親小学校への出前授業および教職員への講習会に招かれた。また白鶴美術館(神戸市)の講演会にも講師を派遣した。

2. 今年度の活動経過

* 具体的な内容を記述してください。

実施項目①: 2010 年度当研究所研究員の主な研究業績

- 加地 伸行
 - 著書 沈黙の宗教 ―儒教 (ちくま学芸文庫) (筑摩書房 2011 年4月)
 - 著書 漢文法基礎 ―本当にわかる漢文入門 (講談社学術文庫) (講談社 2010 年 10 月)
- 芳村 弘道
 - 著書 十抄詩・夾注名賢十抄詩 (汲古書院 2011 年 4 月)
 - 著書 入門講座 白川静の世界Ⅱ 文学 (立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所叢書) (2010 年9月)
 - 論文 白川静文庫と文庫所蔵の胡適手識『章氏遺書』「學林」第五一号 (中国藝文研究会、2010 年 6 月)
 - 論文 南宋選學書『選詩演義』考 「日本中國學會報」第 62 集 (2010 年 10 月)
- 萩原 正樹
 - 著書 入門講座 白川静の世界Ⅱ 文学 (立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所叢書) (2010 年9月)
 - 論文 『詞学筌蹄』考論 「風絮」第 6 号 (2010 年 3 月)
 - 論文 静学詞存 「風絮」第 6 号 (2010 年 3 月)
 - 論文 蕪城秋雪の『香草墨縁』について 「學林」第 51 号 (2010 年 6 月)
 - 論文 論中国的“日本詞”研究 「徐州工程学院学报」(社会科学版)第 4 号 (2010 年 7 月)
 - 論文 森川竹磳の詞論研究 「南京師範大学文学院学报」第 59 号 (2010 年 9 月)
 - 論文 關於《欽定詞譜》兩種内府刻本的異同 「詞学」第 24 号 (2010 年 12 月)
 - 論文 森川竹磳研究ノート 中村花瘦と森川竹磳 「學林」第 52 号 (中国藝文研究会、2010 年 12 月)
- 高島敏夫
 - 著書 入門講座 白川静の世界Ⅰ 文字 (立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所叢書) (2010 年9月)

実施項目②紀要発行

計画の実施状況

『立命館白川静記念東洋文字文化研究紀要』第四號を発行した。

内容は以下の通りである。

<論文>

・讀「作册考」

―白川文字學の原點に還る(三)― 高島 敏夫

・中国から見た白川文字学

―白冰著『青銅器銘文研究―白川静金文学著作的成就与疏失』について― 張 莉

<研究ノート>

・銀雀山漢簡殘簡について 石井 真美子

・國內所見詞譜異同表 萩原 正樹

<翻訳>

・「字統の編集について」 白川静

Zur Herausgabe von `Das Zeichensystem`
Christoph B. SCHMITZ

実施項目③: 白川静記念東洋文字文化賞の実施

計画の実施状況

第四回の発表・表彰式及び、第五回の募集・選考を行った。第四回の選考結果は以下の通りである。

- ・立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞
受賞者: 久米 雅雄(大阪芸術大学客員教授)
対象業績: 印章研究
- ・立命館白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞
受賞者: 岡墻 裕剛(北海道大学大学院文学研究科 専門研究員)
対象業績: 『文字のしるべ』(B・H チェンバレ著)の文献学的研究

実施項目④: 白川静生誕 100 周年記念フォーラムの開催

計画の実施状況

白川静生誕 100 周年記念フォーラムを開催した。第 1 部は、第四回立命館白川静記念東洋文字文化賞表彰式を実施。第 2 部は、編集工学所長の松岡正剛氏の講演会。第 3 部は、座談会「白川静を語る」を実施。約 200 名の参加があった。

詳細は以下の通り。

日時: 2010 年 6 月 6 日(日) 14 時～17 時

場所: 以学感 2 号ホール

第 1 部(13:00～13:10) ◆ 第 4 回立命館白川静記念東洋文字文化賞表彰式
: 講評 & 表彰 (加地伸行・立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所所長)
: スピーチ (受賞者 2 名)

第 2 部(13:10～14:00) ◆ 松岡正剛氏 講演会

第 3 部(14:10～14:55) ◆ 座談会「白川 静を語る」

パネラー: 松岡正剛氏、津崎幸博氏、谷口義介氏、沈慶昊氏、高島敏夫氏
司会: 加地伸行所長

実施項目⑤: 白川文庫開設・白川文庫開設記念展の開催

計画の実施状況

本学図書館に「白川静文庫」が開設された。また、立命館創始 140 年、学園創立 110 周年にあわせて、5 月、6 月に図書館一階の展示コーナーにおいて「白川静文庫開設記念展」を開催した。白川文庫の整備に合わせて、先生の自筆原稿やノート、ガリ版資料などが展示された。

実施項目⑥: 白川研究所便り発行

計画の実施状況

『白川研究所便り第 5 号』を 2010 年 6 月 6 日に開催された「白川静先生の生誕 100 周年記念フォーラム」にあわせて発行した。

以下が詳細である。

- ・今年度の事業状況－研究所長 加地伸行
- ・白川静文庫の開設と『白川静文庫目録』の完成－副研究所長 芳村弘道
- ・特殊講義「白川学の世界」の開講について－運営委員 萩原正樹
- ・『京都太秦物語』制作談
 - 白川文字学研究者榎大地の創造
 - －立命館大学映像学部准教授 富田美香
- ・『京都太秦物語』と白川学－研究員 高島敏夫
- ・二〇〇九年度 文化事業活動報告－文化事業担当 久保裕之
- ・二〇〇九年度 学術活動報告－副研究所長 芳村弘道
- ・編集後記－芳村弘道

実施項目⑦:漢字探検隊

計画の実施状況

2007 年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのものテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとなった自然や文化を学習する体験型の講座である。本年度の実施講座は以下の通り。

地域	回	実施年月	テーマ	講座名	参加申込	場所
京 都	20	2010.5	動物	動物園で漢字と出会う	124	京都市動物園
	21	2010.8	醸造	お酒と漢字	50	月桂冠大倉記念館
	22	2010.12	植物	植物園で漢字と出会う	39	京都府立植物園
	23	2011.3	災害・気象	災害・気象と漢字	68	京都市市民防災センター
	24	2011.3	—	漢字あそび大会	120	立命館大学
東 京	10	2010.6	海洋生物	水族館で漢字と出会う	32	しながわ水族館
	11	2010.9	災害・気象	防災と漢字	21	東京消防庁本所防災館
	12	2011.1	食べ物	市場で漢字を探す	15	文京区公設真砂市場
宮城	2	2010.5	農業	ふるさと漢字探検隊	60	角田市一円
神戸	4	2010.8	科学	漢字に見る科学の目	56	神戸市立青少年科学館
広島	3	2010.5	動物	動物園で漢字と出会う	23	広島市安佐動物公園
福岡	1	2010.10	神	神様と出会う漢字	16	太宰府天満宮

※京都・東京は年間複数回の開催を行っているほか、宮城・広島では、年1回の恒例開催となっている。本年度は「オール立命館校友大会」の福岡市での開催に合わせて、太宰府天満宮での開催が実現した。神戸での開催はコープこうべ生活文化センターとの共催である。

実施項目⑧:第1回創作漢字コンテスト

計画の実施状況

産経新聞者との共催で創作漢字コンテストを実施した。2010年5月に審査結果が発表された。約6,000件の応募があり、産経新聞紙面をはじめするメディアで取り上げられ大きな関心を集めた。第2回創作漢字コンテストについても2010年度中に

募集を開始し、2011年度5月に審査結果が発表される予定である。

実施項目⑨:学内組織との連携事業

計画の実施状況

2010年8月には、立命館大学国際平和ミュージアムとの共催により「戦争と平和の漢字」についてワークショップを開催した。同年10月下旬から11月初旬の一週間には、同じく国際平和ミュージアムとの連携で平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色文字・活字文化の日特別企画」を本年も開催した。平和への願いを一字で表すコーナーを設け、参加者には虹の七色等の漢字について解説したカードをプレゼントした。

9月には立命館附属校を紹介する「立命館フェア」で、また10月末に開催された上述の「オール立命館校友大会」では、会場内に「生誕百周年・白川静の世界」の出展を行った。

実施項目⑩:他の教育機関との共催事業

計画の実施状況

神戸のコープこうべ生活文化センターと神戸市立青少年科学館との共催により、2010年8月に「神戸漢字探検隊・漢字に見る科学の目」が開催された。また10月から12月にかけて、同センターにおいて一般向けに「白川静と東洋文字文化の世界」講座を、また児童向けに「子ども漢字塾」を開講した。

実施項目⑪:福井県との連携事業

計画の実施状況

福井県とは引き続き活発な交流が続いている。白川静生誕百年を迎えた2010年度は、「文字の国・福井」を標榜し、県内外で催事や展示、講座開催など様々な活動がなされた。2010年4月には、白川静を「ブランド」として首都圏で売り出すべく、東京で白川研と福井県、文化教育サポーターズとの共催による「白川静と東洋文字文化の世界」講座を開催した。2009年度に白川研との東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との共催により京都で開催した「好奇字典」のパネル展示が、2010年10月に福井県立図書館・白川文字学の室で行われた。

また、県教育委員会主催による「白川文字学指導者養成講座」、一般向けの「漢字文化講座」、児童と保護者対象の「親子ふれあい漢字教室」が開かれ、白川研より都度講師を派遣した。

映画「京都太秦物語」は2010年9月に福井市でも公開され、県の広報協力そして県青少年愛護審議会の推奨も得て、他地域には比類しない興行成果を挙げた。

2010年度には従来の取り組みに加え、教員対象の「漢字教育士」養成講座の開催や、県教委・福井大学との連携による集中講座の開催が予定されている。

実施項目⑫:その他白川文字学の普及者ネットワーク構築活動

計画の実施状況

書籍発刊…福井県教育委員会編の小学校用字源辞典『白川静博士の漢字の世界へ』改訂版(平凡社刊)と小寺誠氏(元京都府教員)による系統別字源解説書『白川静式小学校漢字字典』(フォーラム・A刊)が、二〇一一年二月に刊行された。

出張講座…滋賀県草津市立南笠東小学校および京都市立正親小学校への出前授業および教職員への講習会に招かれた。また白鶴美術館(神戸市)の講演会にも講師を派遣した。

伊東信夫氏(漢字研究家。『漢字が楽しくなるシリーズ』(太郎次郎社エディタス刊)や『成り立ちで知る漢字のおもしろ世界シリーズ』(スリーエーネットワーク刊)の著者)を「京都漢字探検隊—漢字あそび大会」に招き、講演などを行った。

文化教育サポーターズ(東京都文京区内を中心に有識者・企業・保護者等により結成、教育支援の目的でセミナー、シンポジウム等を開催している団体)により、二〇一〇年十一月に文京区春日・公設真砂市場内にて「東京漢字探検隊」常設ブースを開設。児童向けの漢字教室、白川関連書籍の発売などを行っている。

本年度の予算執行合計 6,176,422 円

本年度当初予算合計 5,000,000 円

(上記予算に加え、『白川静の世界』印税収、『白川静の世界』売上収入あり)

2010年度 事業報告書
【自2010年4月1日～至2011年3月31日】

研究所名	コリア研究センター
研究所長名	桂島 宣弘

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	<i>上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額</i>	
科学研究費補助金	件 (円)	
その他外部資金	2件 (1,200,126円)	民族問題研究所 567,936円 韓国学中央研究院 632,190円
学内助成	4件 (7,960,000円)	R-GIRO 2,000,000円、国際成果発信 2,000,000円 110周年 2,000,000円(展示)、1,960,000円(シンポジウム)
寄附金	11件 (575,100円)	企業寄付 3件 個人寄付 8件
収入	2件 (2,762,293円)	シンポジウム資料集販売代 119,000円 映画祭関連 2,643,293円
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	3件	東亜大学石堂学院、海洋大学国際海洋問題研究所、韓国国立木浦大学島嶼文化研究院と交流協定締結。
研究ネットワーク形成	4件	学術協定校との交流事業 シンポジウム：東国大学（2回）、木浦大学（1回） ワークショップ：東亜大学（1回）
研究会実施状況	10件	月例研究会（8回）、人間科学研究所共催研究会（1回） 政策科学研究科オープンリサーチ（1回）
3. 成果発信		
学術図書出版	件	
学術論文	1件	次世代研究者フォーラム論文集 No4
学会発表	件	
シンポジウム等	7件	RiCKS 国際シンポジウム（3回）、特別シンポジウム（2回）、講演会（1回）、次世代研究者フォーラム（1回）

紀要発行	1 件	코리아研究 2 号
4. 人材育成		
PD・RA の雇用	2 名	RA2 名
院生の PJ 参加	7 名	次世代研究者フォーラム参加 (4 名)、東亜大学とのワークショップ (2 名)、月例研究会 (1 名)
5. 社会貢献活動		
公開講座の実施	3 件	「韓国併合」100 年特別講座 1 回 (参加 155 名) 「韓国併合」100 年特別展トークショー (2 回)
展示会の実施	1 件	「韓国併合」100 年特別展
一般刊行物発行	件	
6. その他		
文化事業	2 件	映画上映会 (1 回)、韓国映画フェスティバル (1 回)
インタビュー事業	1 件	韓国史関連日本元老学者口述インタビュー(受託研究)

2. 今年度の活動経過

* 具体的な内容を記述してください。

実施項目①: 2010 年度第 1 回運営委員会 (4 月 19 日)

実施項目②: 第31回RiCKS 月例研究会

報告: 金恵玉 (立命館大学社会学研究科博士研究員)

「韓国における平和教育の現状と課題—平和教育の実態事例を踏まえて」 (4 月 21 日)

実施項目③: 「光州民衆抗争30 周年2010 年特別シンポジウム『抵抗と平和』」

主催: 全南大学校5・18 研究所、共催: 日本平和学会

協力: 立命館大学코리아研究センター・聖公会大学校民主主義研究所・

韓国ジェノサイド学会・早稲田大学アジア平和研究所・

恵泉女学園大学平和文化研究所

場所: 全南大学 (4月29日~5月2日)

実施項目④: 第32回RiCKS 月例研究会
報告: 李豪潤 (立命館大学文学部日本史学専攻助教)
「近世における通信使・燕行使の交流と東アジアの知のネットワーク」(5月19日)

実施項目⑤: 南成旭氏 (国家安保戦略研究所所長、高麗大学教授) 講演会
「韓国政府の対北朝鮮政策—最近の北朝鮮情勢と朝鮮半島情勢分析」
主催: 立命館大学国際関係学部、協力: 立命館大学コリア研究センター
場所: 立命館大学衣笠キャンパス創思館 (5月28日)

実施項目⑥: 第8回RiCKS 国際シンポジウム「東北アジアの安全保障と信頼醸成」
主催: 立命館大学コリア研究センター、共催: 東国大学北韓学研究所・
立命館大学国際関係学部、
場所: 立命館大学衣笠キャンパス創思館 (5月29日)
予算執行状況
謝金 8万円 (2人)、滞在費 4万円 (3人)、人件費 5万円、委託費 5万円、
国内交通費 4万円 (2名)、送料 2万円、会議渉外費 3万円

実施項目⑦: 第33回RiCKS 月例研究会
報告: 金昌祿 (慶北大学校法学専門大学院教授、立命館大学法学部客員教授)
「1910年韓日条約をどう見るべきか」(6月16日)

実施項目⑧: 韓国史関連日本元老学者口述インタビュー事業
2009年7月1日～2010年6月30日
予算執行状況
謝金 24万円 (8人)、人件費 99万円、国内交通費 35万円、その他 6万円

実施項目⑨: 第9回RiCKS 国際シンポジウム「新国際協調主義時代における東アジアと朝鮮半島」
主催: 立命館大学コリア研究センター
場所: 立命館大学朱雀キャンパス5階大講義室 (7月1日)
予算執行状況
謝金40万円(16人)、国内交通費18万円(14名)、国外交通費16万円(3名)、
宿泊費16万円(8名)、印刷費20万円、委託費7万円、送料2万円、
会議渉外費10万円

実施項目⑩: 2010年度第2回運営委員会 (7月12日)

実施項目⑪: 第34回RiCKS 月例研究会
報告: 李大勲 (聖公会大学校NGO 大学院兼任教授、
立命館大学国際関係学部客員教授)
「『平和国家』論の提起と安保問題に対する市民的介入」(7月21日)

実施項目⑫: 『立命館大学コリア研究センター次世代研究者フォーラム論文集』No.3 発行
(7月29日)

実施項目⑬: 「ドキュメンタリー映画 弁護士布施辰治」上映会

共催：ドキュメンタリー映画「弁護士布施辰治」上映実行委員会、
立命館大学コリア研究センター
場所：立命館大学朱雀キャンパス5 階大講義室（7月31日）

実施項目⑭：第5回RiCKS 次世代研究者フォーラム
「韓国併合100 年を迎えた韓国・朝鮮研究の課題」
場所：立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館（8月2日～4日）
予算執行状況
国内交通費3万円（3名）、国外交通費9万円（3名）、会議渉外費12万円、
その他1万円

実施項目⑮：東亜大学石堂学術院地域文化研究所と学術交流協定を締結（8月24日）

実施項目⑯：海洋大学国際海洋問題研究所と学術交流協定を締結（8月24日）

実施項目⑰：韓国国立木浦大学島嶼文化研究院と学術交流協定を締結
韓国国立木浦大学島嶼文化研究院と学術シンポジウム（8月26日）

実施項目⑱：第35回RiCKS 月例研究会
報告：アンドレ・ヘイグ
（スタンフォード大学大学院東アジア文化言語研究科博士課程）
「中西伊之助と大正期日本の「不逞鮮人」へのまなざし—大衆ディスコースとコロ
ニアル言説の転覆」（10月2日）

実施項目⑲：東国大学北韓学研究所・立命館大学コリア研究センター主催学術シンポジウム
「北朝鮮の後継体制構築を李明博政府後半期の対北・統一政策の展望」
場所：東国大学（10月22日）

実施項目⑳：第36回RiCKS 月例研究会
金貴玉（漢城大学校教授、漢城大学校戦争と平和研究所所長、同志社大学客員教授）
「1950年代の反共と間諜の韓国社会—『東亜日報』の分析を中心に」（11月17日）

実施項目㉑：第5回RiCKS 韓国映画フェスティバル
「ソル・ギョング—100の顔（ペルソナ）をもつ男」
主催：立命館大学コリア研究センター
場所：立命館大学朱雀キャンパス5 階大講義室（11月19日～21日）

実施項目㉒：特別シンポジウム「ソル・ギョング—韓国現代史の体現者」
司会：富田美香（立命館大学映像学部准教授）
パネリスト：ソル・ギョング、佐々充昭（立命館大学文学部教授）、
許文暎（『シネ21』前編集長）、
場所：立命館大学朱雀キャンパス大講義室（11月21日）

①② 予算執行状況

謝金 18 万円(4 名)、国内交通費 11 万円、国外交通費 31 万円、人件費 3 万円
印刷費 35 万円、委託費 32 万円、賃借料 32 万円、送料 11 万円、会議渉外費 11 万円、
その他 46 万円

実施項目⑳: 第37回RiCKS 月例研究会

報告: 張完翼 (法務法人ヘマル弁護士、前親日財産調査委員会事務処長)
「国家犯罪と懲罰的損害賠償～スージー・キム事件を中心に」 (12 月 15 日)

実施項目㉑: 2010 年度第 3 回運営委員会 (12 月 23 日)

実施項目㉒: 第38回RiCKS 月例研究会

報告: 朴京淑 (ソウル社会学科副教授、京都大学大学院文学研究科)
「北朝鮮の人口変動—1990 年代以降の経済難と人口変動」 (1 月 12 日)

実施項目㉓: 立命館大学大学院政策科学研究科オープンリサーチ

報告: 申順浩 (国立木浦大学社会科学部地籍学科教授)
「韓国の行政区域改編政策について」
主催: 立命館大学大学院政策科学研究科、共催: 立命館大学コリア研究センター
場所: 末川記念会館第 3 会議室 (1 月 18 日)

実施項目㉔: 第10回RiCKS 国際シンポジウム「言葉のなかの日韓関係」

主催: 立命館大学コリア研究センター、助成: 韓国学中央研究院
場所: 立命館大学衣笠キャンパス創思館 (1 月 22 日)
予算執行状況
謝金 27 万円(8 名)、国内交通費 16 万円 (7 名)、印刷費 5 万円、委託費 6 万円、
会議渉外費 3 万円、その他 4 万円

実施項目㉕: 立命館大学人間科学研究所・コリア研究センター(RiCS) 共催研究会

報告: 崔灵淑 (韓国保健福祉資源研究院 常任理事)
「韓国社会の高齢化と介護労働の課題」
場所: 立命館大学衣笠キャンパス学而館 (1 月 27 日)

実施項目㉖: 立命館大学コリア研究センター、東亜大学石堂学院共同ワークショップ

「人文学研究と平和構築の新地平—日韓共同研究と人文共同体の可能性を探る」
主催: 立命館大学コリア研究センター、東亜大学石堂学院
場所: 立命館大学衣笠キャンパス創思館 (2 月 22 日)

実施項目㉗: 立命館土曜講座「東アジア共同体は必要か可能か—日本復活の戦略と政策課題」

講演者: 進藤榮一 (筑波大学名誉教授)
協催: 立命館大学コリア研究センター
場所: 立命館大学衣笠キャンパス創思館 (2 月 28 日)

実施項目㉘: 立命館創始140 年・学園創立110 周年記念

「併合」100年特別展示展記念特別講座「朝鮮植民地支配をどう見るのか」

主催：立命館大学コリア研究センター・民族問題研究所

場所：立命館大学衣笠キャンパス創思館（3月1日）

予算執行状況

謝金25万円（7名）、国内交通費6万円（5名）、国外交通費8万円（2名）、人件費1万円、

印刷費30万円、委託費61万円、会議渉外費13万円、その他6万円

実施項目⑳：2010年度第4回運営委員会（3月4日）

実施項目㉑：立命館創始140年・学園創立110周年記念

「韓国併合」100年特別展示展「巨大な監獄、植民地朝鮮に生きる」

主催：立命館大学コリア研究センター・立命館大学国際平和ミュージアム・
民族問題研究所、

場所：立命館大学国際平和ミュージアム（3月1日～20日）

予算執行状況

国内出張旅費4万円、国内交通費10万円、国外交通費16万円、人件費4万円

委託費140万円、送料5万円、その他7万円

実施項目㉒：『立命館大学コリア研究センター次世代研究者フォーラム論文集』No.4 発刊
（3月31日）

予算執行状況

謝金11万円、印刷費35万円、委託費13万円

実施項目㉓：『コリア研究』第2号刊行（3月31日）

予算執行状況

人件費6万円、委託費6万円、印刷費70万円

本年度の予算執行合計

11,820,364円

3. **その他、特記事項がある場合のみ記載してください。**

2010 年度 事業報告書
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	金融・法・税務研究センター
研究所長名	大垣 尚司

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額	
科学研究費補助金	0 件 (円)	
その他外部資金	2 件 (24,884,119 円)	国土交通省公募補助事業 金融・法・税務研究センター繰越額：10,820,867 円 実務講座：14,063,252 円 繰越額：11,967,252 円、受講料収入額：2,096,000 円
2. 研究ネットワークの構築		
研究会実施状況	2 件	信託法研究会 住宅政策研究会（国土交通省担当官との研究会）
3. 成果発信		
学術図書出版	1 件	『金融と法－企業ファイナンス入門』有斐閣
学術論文	8 件	「金融財政事情」「税制研究会」「立命館法学」他
4. 人材育成		
PD・RA の雇用	名	
PD・RA の就職（常勤）	件	
院生の PJ 参加	名	
5. 社会貢献活動		
実務講座の実施	3 件	・ 第 4 回税法公開東京講座 ・ 「金融と法」東京講座 ・ 地方銀行担当者向け金融経営人材講座
審議会等委員		独立行政法人住宅金融支援機構評価委員会委員（大垣）

6. その他		
公的住みかえ支援事業		金融・法・税務研究センターが主体となり設立した一般社団法人移住・住みかえ支援機構（所長が代表理事を兼務。無報酬）との共同事業。 関連公募補助事業に応募し、大垣業績欄記載の5事業が採用された。
ラジオ番組への出演		文化放送（週1回15分）シニア層の移住・住みかえを促進する啓蒙番組をパーソナリティーとして担当。

今年度の活動経過

*具体的な内容を記述してください。

実施項目①:「金融と法」東京講座の開講

東京キャンパスで開講 全90コマ(1コマ:90分)

受講者数:個人枠16名、企業枠4(9名)

サブプライム後を見据えた講義内容の改訂の実施。地方銀行企画担当者をオブザーバー参加者として迎えた演習科目の大幅刷新の実施。

金融と法東京講座のカリキュラムに基づく教科書の刊行した『金融と法—企業ファイナンス入門』有斐閣(2010年5月)

実施項目②:第4回税法公開東京講座の開講

東京キャンパスで開講(13時~17時) 全10回開講 1回テーマごとに受講申込を行なった。

受講者数:延べ65名(主に税理士等の実務家)

講師は研究者と実務家(税理士・弁護士)複数名が担当し、講師陣によるパネルディスカッションと議論を中心に講義をおこなった。講義の場では双方向の鋭い意見交換がなされ、講師と受講生が共に議論し、共に学ぶ場という新しい講座スタイルが特色になっている。

第1テーマ:全3回(民主党税制改革は何をもたらすか)

第2テーマ:全2回(税務・税理士にとって必要な労働法の理論と実務)

第3テーマ:全2回(税理士のための申告・手続・争訟をめぐる理論と実務)

第4テーマ:全3回(相続をめぐる理論・法務・税務)※内1回は震災の影響により中止となった。

実施項目③:公的住みかえ支援事業

金融・法・税務研究センターが主体となり設立した一般社団法人移住・住みかえ支援機構(所長が代表理事を兼務。無報酬)との共同事業。

関連公募補助事業に応募し、下記5事業が採用された。

(採択された国土交通省公募補助事業)

1. 既存住宅の流通に資する、リフォーム条件付き既存住宅売買にかかる契約時関連書式の整備、ならびに、住宅履歴の管理、定期点検・補修の促進に資する移住・住みかえ支援適合住宅制度(改良既存住宅)整備事業(国土交通省平成22年度長期優良住宅先導事業)

(総額 1,500 万円 平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月)

2. 介護報酬債権担保付借上げスキームを活用したケア付賃貸住宅事業システム 第 2 年度(国土交通省平成 22 年高齢者居住安定化モデル事業)
(平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月 総額 1,000 万円)

3. 地域金融機関における家賃ノンリコース型住宅ローン プロトタイプ開発事業(国土交通省 平成 22 年度 長期優良住宅等推進環境整備事業[ノンリコースローン等先導的な住宅ローンの推進])
(総額 1,000 万円 平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月)

4. 住宅履歴情報の普及促進に関する調査等を実施する事を行う者に対する補助事業
(国土交通省住宅局平成 22 年度業(既存住宅長期利用環境整備事業))
(総額 2,000 万円 平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月)

5. 住みかえ先・二地域居住先に対するニーズ等調査と類型別チェックポイント作成ならびに流通支援に係る情報基盤整備事業(国土交通省 平成 22 年度長期優良住宅等推進環境整備事業[住替え・二地域居住の推進])
(総額 1,500 万円 平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月)

実施項目④:地域共創ネットワークとの共同金融経営人材講座
地方銀行担当者向け金融経営人材講座を実施
受講者数各 16 名程度 (1泊2日×2回) 地域共創ネットワークとの共同。

実施項目⑤:研究会の開催
・信託法研究会
・住宅政策研究会(国土交通省担当官との研究会)
・

本年度の予算執行合計
(本年度当初予算合計)

4,815,174 円
24,884,119 円)

2. その他、特記事項がある場合のみ記載してください。

***2010 年度 事業報告書**
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	生存学研究センター
研究所長名	立岩 真也

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	<small>上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額</small>	
グローバル COE プログラム	1 件 (28,000,000 円)	「生存学」創成拠点—障老病異と共に暮らす社会へ—
科学研究費補助金	11 件 (68,830,000 円)	基盤 A4 件、基盤 C5 件、萌芽研究 1 件、新学術研究 1 件
その他外部資金	11 件 (7,879,000 円)	学振ひらめきときめきサイエンス 35 万円、(株)パステルラボ受託研究 20 万円、(株)オリエントコーポレーション 20 万円
学内助成	10 件 (49,085,000 円)	R-GIRO2 件 800 万円、基盤研究 4 件 339 万円、図書出版プログラム 1 件 100 万円、若手スタートアップ 1 件 100 万円、国際化推進プログラム 2 件 190 万円、政策重点基盤的研究 3379 万円
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	3 件	リーズ大学（イギリス）と学術研究協定締結、韓国障害学研究会と覚書締結、ベルガモ大学（イタリア）と学術研究協定締結に向け調印中。
NGO・患者会等ネットワーク形成	5 件	日本 ALS 協会、アフリカ日本協議会、滋賀県難病連絡協議会、18 トリソミーの会、DPI 日本会議と共同プロジェクト・企画を運営
3. 成果発信		
学術図書出版	18 件	
学術論文	105 件	査読付論文 38 件、外国語論文 7 件
学会発表	85 件	海外学会発表 6 件、国内学会発表 79 件

シンポジウム等	7件	「生存学×医療の哲学×生命倫理学—安楽死を巡る学説の展望と課題—」、7th International Conference Multiculturalism and Social Justice Democracy and Globalization、「国際障害学セミナー」、「合成生物学・倫理・社会」ほか
公開研究会	63件	「現代社会における統制と連帯」研究会、地域生活を考える、身体論研究会、マイノリティ研究会、老い研究会、出生をめぐる倫理研究会、認知症介護研究会等
紀要発行	4件	生存学研究センター報告 13~15号、雑誌『生存学 vol.3』（レフェリー付）
ホームページ	1100万ヒット/年	
メールマガジン	46件	日本語 16件、英語 24件、韓国語 6件
4. 人材育成		
PD・RAの雇用	29名	PD6名、RA23名
PD・RAの就職(常勤)	3件	主な就職先：衣笠総合研究機構 PD、博士キャリアパス推進室 学部大学院課専門契約職員
院生プロジェクト(公募制)	9件	老い研究会、規範×秩序研究会、高齢者問題における歴史社会学的研究、「精神保健・医療と社会」研究会マイノリティ研究会他
若手グローバル活動支援(公募制)	9件	ケンブリッジ大学での国際カンファレンス「フーコー、家族、政治」への参加(イギリス)、「障害とアートの歴史的展開」(フランス)、「障害者としての水俣病患者像」(韓国)他
5. 社会貢献活動		
公開講座の実施	15件	シネマで学ぶ「人間と社会の現在」シリーズ 5~8(参加のべ 1,234名)、『ひらめき☆ときめきサイエンス~ようこそ KAKENHI』、ホームカミングデー「この国で老いて生きること」ほか
一般刊行物発行	4件	『人間の条件——そんなものない』(理論社)よりみちパン!セ、『はじめて出会う生命倫理』(有斐閣)他
初等・中等教育との連携	1件	創思館にて『ひらめき☆ときめきサイエンス~ようこそ KAKENHI「病とともに生きるという生き方—生きることの楽しさを難病の患者さんから学ぶ」を実施(6時間)
高等教育・NPOなどとの連携	7件	ITP・サービスラーニング研修(立正大学・湘南工科大学)、山中伸弥教授 iPS細胞講演会(滋賀県・滋賀県難病連絡協議会)、「アフリカの障害者の現状と課題」(DPI 日本会議)他
学協会の運営、事務局業務	1件	2012年度生命倫理学会大会準備事務局活動
審議会等委員	9名	文化庁文化審議会文化財保護天然記念物委員会委員、京都府男女共同参画審議会委員、亀岡市男女共同参画審議会委員、2011年度日本学術振興会「研究成果の社会還元・普及事業」の推進委員会委員、守山市障害者自立支援審査会委員、日本学術会議医師の専門職自律検討委員会、介護支援専門員実務研修受講試験委員検討委員会、国立民族学博物館運営委員、滋賀大学監事

6. その他		
受賞歴	1件	第41回大宅壮一ノンフィクション賞受賞 川口 有美子『逝かない身体——ALS的日常を生きる』（医学書院）

2. 今年度の活動経過

*具体的な内容を記述してください。

実施項目①:グローバル研究活動推進

計画の実施状況

(1)韓国障害学研究会(研究協力覚書締結)ほかとの研究交流企画を 5/27~29、11/23~27 の2回韓国(キョンギ大学ほか)において実施した。「若手グローバル活動支援」を活用し延べ16名の視覚障害者を含む院生、PDが参加し報告した。

(2)ベルガモ大学(研究協力協定調整中)でThe 2nd Workshop: The Mechanization of Empathy in Health Careを開催、視覚障害者を含む院生2名が報告した。

(3)リーズ大学障害学研究センター(研究協定締結)のバーズ教授集中講義(9/21~24)を契機に、視覚障害者を含む院生・PDと同センターメンバーとの研究交流を実施した。

(4)1/8~9開催の7th International Conference Multiculturalism and Social Justice Democracy and Globalizationには、海外からの若手研究者9名と院生が報告し、教員とゲスト研究者も参加して活発な議論が行われた。

予算の執行状況

海外出張旅費 106万円、翻訳謝金 178万円 計 284万円

実施項目②:若手研究者の研究支援プログラム

計画の実施状況

「院生プロジェクト」は、院生を研究代表者とする萌芽的研究プロジェクトに対して研究活動費を支援するものである。今年度は9件を採択、延べ76名が参加し、共同報告、論文掲載、書籍発行等の成果発信につながった。PDは院生のプロジェクト活動を支援しながら、自らも拠点の成果発信に寄与した。またRAは専門領域に応じた学術的なウェブコンテンツの作成や書籍アーカイブ整備を行った。

予算の執行状況

国外出張旅費 93万円、国内出張旅費 36万円、PD人件費(5名)1,500万円、RA人件費(24名)1,145万円 他 計 2,800万円

実施項目③:「身体×世界:関連書籍」とおよび患者団体等ニュースレターの収集・DB化

計画の実施状況

主に日本語で1930年代以降に出版された医療、福祉、環境、生殖、生命倫理、社会問題、マイノリティ等に関する書籍アーカイブをつくり、データベースを作成した。また、一般には入手が難しい患者団体等が発行するニュースレターの収集と整理を行い、学外者にも閲覧に供している。

予算の執行状況

図書資料費(850冊)233万円、アルバイト人件費(26名)490万円 計 723

万円

その他実施項目1 刊行物の発行

計画の実施状況

『生存学研究センター報告』13～15号を刊行した。いずれも院生・PDらが編者となり、院生主宰のプロジェクト(13/14号)、国際学会(15号)など若手研究者中心に運営した本センター関連活動の研究成果である。また2011年3月刊行の『生存学』第3号(生活書院)には、院生20名が執筆している。執筆準備の研究会を重ねて教員が指導し、査読を経て掲載するという体勢で臨んでいる。

予算の執行状況

印刷費 222万円 計 222万円

その他実施項目2 社会貢献活動

計画の実施状況

神経難病患者の協力による小学生を対象とした「生きることの楽しさを難病の患者さんから学ぶ」、患者会との共催による医療倫理・バイオテクノロジー関連の講演会や在宅医療の研修会、連続企画「シネマで学ぶ『人間と社会の現在』」、第一回ホームカミングデーでの老人問題講演会等、生存学の特徴を生かした多様なアウトリーチ活動を実施した。

予算の執行状況

上映借用料 37万円、謝金 14万円、アルバイト人件費 37万円他 計 129万円

本年度の予算執行合計
(本年度当初予算合計)

43,740,023円
29,926,863円)

3. その他、特記事項がある場合のみ記載してください。

2010年度には、本センターに関係する若手研究者の単著(8点)、共著(3点)が単行書として刊行された。単著のうち、6点は先端総合学術研究科の博士論文(1件は学会奨励賞内定)、1点は博士予備論文、1点は書き下ろしで第41回大宅壮一ノンフィクション大賞を受賞した。また、雑誌『生存学』は執筆者がほとんど大学院生であり、書店で販売される雑誌としては異例といえる。人文系の場合、専門学術誌掲載論文以上に書店に並ぶ単行書を通じて研究成果が伝達される傾向が強い。本センターの基幹プロジェクトであるグローバルCOEは手厚い若手研究者支援策を特徴としており、先端総合学術研究科のプロジェクト型教育との相乗効果により、高いパフォーマンスを達成したといえる。グローバルCOEの終了後も、院生の研究活動をセンターが積極的に支援する仕組みを何らかの形で確保したいと考える。

2010 年度 事業報告書
【自 2010 年 4 月 1 日～至 2011 年 3 月 31 日】

研究所名	間文化現象学研究センター
研究所長名	谷 徹

1. 今年度の実績

項目	今年度実績	備考（特記事項、主な内訳など）
1. 研究プロジェクトの実施	<small>上段は受け入れ件数 下段は受け入れ金額</small>	
科学研究費補助金	1 件 (2,500,000 円)	基盤 B1 件
学内助成	1 件 (800,000 円)	国際的発信強化 800,000 円
2. 研究ネットワークの構築		
研究ネットワーク形成	2 件	OP0 III および Workshop: Transkulturelles Philosophieren aus ostasiatischer Sicht に参加（同一人物 1 名）。
研究会実施状況	4 2 件	間文化現象学研究会
3. 成果発信		
学術図書出版	1 件	メンバー 2 名による翻訳
学術論文	1 4 件	査読無論文 10 件（邦語）、外国語論文 4 件（うち 1 件は査読付）
学会発表	7 件	海外学会発表 3 件、国内学会発表 4 件
シンポジウム等	4 件	①ワークショップ・講演会：講演者 1 名（参加者のべ 38 名）、②講演者 2 名（参加者 13 名）、③映画上映会・討論会：討論者 4 名（参加者多数）、④講演者 6 名（参加者のべ 80 名）
4. 人材育成		
PD・RA の雇用	2 名	RA2 名

2. 今年度の活動経過

*具体的な内容を記述してください。

実施項目①:研究会・講演会の開催

計画の実施状況

1. 学内メンバーによる「間文化現象学研究会」を年間42回開催した。

2. (2010年5月14, 15日)ミヒヤエル・シュタウディグル氏を招いて「間文化現象学ワークショップ」と「間文化現象学講演会」を開催した。

・ミヒヤエル・シュタウディグル:

『ミッシェル・アンリ-“個体の形而上学”から“共同体における暴力の批判へ”』(仮)
“Michel Henry: Von der Metaphysik des Individuums zur Kritik der gesellschaftlichen Gewalt”(ドイツ語)

・川瀬 雅也:

『ミッシェル・アンリの現象学における原印象と生活世界』

Urimpression et Lebenswelt dans la phénoménologie de Michel Henry(フランス語)

3. (2010年6月28日)「暴力からの人間性の回復」研究会との共催により、ロディ・リード、リサ・ブルーム両氏を招いて「間文化現象学講演会」を開催した。

・ロディ・リード Roddey Reid(カリフォルニア大学)

“Public Bullying and Democratic Culture, or Abject Subjecthood in US Daily Life”

・リサ・ブルーム Lisa E. Bloom(カリフォルニア大学)

“Climate Change in the Polar Region and its Visualization”

4. (2010年2月25日)ドキュメンタリー映画『哲学への権利 -国際哲学コレージュの軌跡-』上映会&討論会

討論者: 椎名亮輔(同志社女子大学)、加國尚志(立命館大学)

竹内綱史(龍谷大学)、西山雄二(首都大学東京)

5. (2011年3月5日、6日)国際シンポジウム「間文化性と人文学」

基調講演: 上田 閑照(京都大学名誉教授)

・藤田 りん子(ウィーン大学)

「間文化性と音楽学: 雅楽の時間概念と知覚の研究から」

・ペク・ジン(ソウル大学)

「和辻哲郎における風土と空間の倫理」

・ピエール・ロドリゴ(ブルゴーニュ大学)

「芸術、地平、浮世絵」

・マウロ・カルボナーネ(リヨン第三大学)

「沈黙、さまざまな沈黙」

・トーマス・ニーノン(メンフィス大学)

「生活世界における文化的差異の源泉と解決をめぐるフッサールの思想」

・フィリップ・バックリー(マギル大学)

「危機と好機: 人文学(ヒューマニティーズ)をめぐる現象学的反省」

実施項目②: 資料収集

メンバー: 亀井大輔(文学部助教)は、アメリカで資料収集を行った(2010年9月)。

メンバー: 佐藤勇一は、フランスで資料収集を行った(2010年8月)。

実施項目③: 海外での研究発表・ネットワーク形成

・大学院生: 池田裕輔は、ロシア連邦、国立サンクトペテルブルク大学で2010年6月に開催された国際会議に参加、研究発表を行った。

・センター長: 谷は、台湾・高雄で開かれたOPO IIIおよびWorkshop: Transkulturelles Philosophieren aus ostasiatischer Sichtに参加し、海外の研究者とのネットワーク形成を行った。

3. その他、特記事項がある場合のみ記載してください。

2010年度は3月の東日本大震災によって、海外の研究者の来日、東北地方の研究者の上洛に困難が生じたため、2011年3月24日に予定されていた「間文化現象学シンポジウム」の企画を、2011年度に繰り越さざるをえなくなった。